

堤 平 遺 跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 8

2002年2月

日本道路公団中国支社
島根県教育委員会

序

中国横断自動車道尾道・松江線は、「国土開発幹線自動車道法」に基づいて、均衡ある国土の発展に寄与する高速道路の一環として計画が進められ、このうち二刀屋～松江間につきましては、平成9年3月から鋭意建設を進めてまいりました。その過程で路線敷地内にある遺跡について島根県教育委員会と協議し、記録保存のための発掘調査を進めてまいりました。本書は松江工事事務所担当区域である宍道町の堤平遺跡の発掘調査の記録であります。

この記録調査が、はるかな過去に生きた先祖の生活や文化様式を時代を超えて現代に蘇らせ、また、現代に生きる私どもの未来への道しるべとなるとともに今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は島根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる誠意を表すものであります。

平成14年2月

日本道路公団中国支社松江工事事務所

所長 村田一廣

序

島根県教育委員会では、日本道路公団中国支社の委託を受けて、平成 8 年度より中国横断自動車道尾道・松江線建設予定地内にある埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

本報告書は、平成 10 年度に調査した八束郡宍道町にある堤平遺跡の調査結果をまとめたものです。堤平遺跡では、出雲地方では確認例の少ない瓦を持たない古代寺院の可能性がある建物跡群が確認されており、当時の社会を知る上で貴重な資料となるものと思われます。本報告書が地域の歴史を解明する一助となり、さらに埋蔵文化財への関心を高めることに役立てば幸いです。

なお、発掘調査及び本報告書の刊行に御協力いただきました地元の皆様をはじめ、日本道路公団中国支社、宍道町教育委員会ならびに関係の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 14 年 2 月

島根県教育委員会

教育長 山崎悠雄

例　言

1. 本書は日本道路公団中国支社の委託を受けて、島根県教育委員会が平成10年度に実施した中国横断自動車道尾道・松江線の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2. 本書に掲載した遺跡の所在地は次のとおりである。

堤平遺跡：八束郡宍道町白石3391-1

3. 調査組織は次の通りである

平成10年度　調査主体　島根県教育委員会

〔事務局〕勝部 昭（文化財課長）、島地徳郎（文化財課長補佐）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、秋山 実（同課長補佐）、松木岩雄（同課長補佐）

〔調査員〕神柱靖彦（埋蔵文化財調査センター主事）、柳野祐子（同教諭兼主事）、景山厚司（同臨時職員）

平成13年度　報告書作製

〔事務局〕宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）、内田 融（同総務課長）、松木岩雄（同調査課長）、川原和人（同調査課長）、今岡 宏（同総務係長）

〔調査員〕神柱靖彦（埋蔵文化財調査センター主事）、野津 弘（同教諭兼文化財保護主事）

〔整理作業員〕石川真山美、泉山美子、加藤往子、難波夏枝、広田和子

4. 発掘作業（発掘作業員雇用、重機借り上げ、発掘用具調達、測量発注）については日本道路公団中国支社松江工事事務所、社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者協議に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会

〔現場担当〕布村幹夫（現場事務所長）、永原正寛（技術員）、藤原 恒（技術員）

〔事務担当〕深田明子（事務員）、眞庭明美（事務員）

5. 現地調査、及び資料整理に際しては以下の方々から有益な御指導・ご助言・ご協力を頂いた。記して感謝の意を表す。

稻田 誠（宍道町教育委員会）、垣内光次郎（財団法人石川県埋蔵文化財センター）、樋田 誠（小松市教育委員会）、河瀬正利（広島大学教授）、久保智康（京都国立博物館 京都文化資料研究センター）、宍道正弘（斐川町教育委員会）、田中生史（関東学院大学専任講師）、塚本敏夫（財団法人元興寺文化財研究所）、永井 泰（モニュメント・ミュージアム来待ストーン館長）、中原義史（福井県立博物館）、中司照世（福井県立博物館）、蓮岡法璋（島根県文化財保護審議会委員）、花谷 浩（奈良國立文化財研究所）、百瀬正恒（財団法人京都市埋蔵文化財研究所）松山和彦（財団法人石川県埋蔵文化財センター）、森郁夫（帝塚山大学教授）

6. 報告書に掲載した遺物の実測は主として以下の者が行った

〔実測〕神柱・柳野・景山・小豆沢美貴、河野真山美

7. 報告書に掲載した遺物の写真は以下の者が撮影した。

神柱・野津

8. 本書の執筆は神柱・野津が行い、文責は目次に明示した。

8. 報告書に掲載した「遺跡位置図」は国土交通省国土地理院発行の地形図を使用した。
9. 採図中の方位は測量法の北方向を示す。
10. 採図の縮尺は図中に明示した。
11. 出土遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会（埋蔵文化財調査センター）で保管している。

本文目次

第 1 章 調査にいたる経緯と調査経過	(神柱) 1
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査経過	1
第 2 章 遺跡の位置と歴史的環境	(野津) 2
第 3 章 調査の概要	(神柱) 9
第 4 章 堤平遺跡の調査	(神柱) 10
第 1 節 検出した遺構	10
第 2 節 出土遺物	21
第 3 節 まとめ	53

付編　　自然科学的分析

挿 図 目 次

第 1 図 堤平遺跡と周辺の遺跡	3
第 2 図 堤平遺跡調査前地形図	9
第 3 図 堤平遺跡遺構配置図	10
第 4 図 SI-01 実測図	11
第 5 図 SI-02 実測図	12
第 6 図 SI-01・02 出土遺物実測図	13
第 7 図 布掘り建物実測図	14
第 8 図 SB-01 実測図	15
第 9 図 彫り込みを有する岩盤 1 実測図	16
第 10 図 彫り込みを有する岩盤 2 実測図	17
第 11 図 石列 1 実測図	18
第 12 図 石列 2 実測図	18
第 13 図 土坑群実測図	18
第 14 図 SK-07 実測図	19
第 15 図 堤平遺跡出土須恵器実測図（1）	22
第 16 図 堤平遺跡出土須恵器実測図（2）	23
第 17 図 堤平遺跡出土須恵器実測図（3）	24
第 18 図 堤平遺跡出土須恵器実測図（4）	25
第 19 図 堤平遺跡出土須恵器実測図（5）	26
第 20 図 堤平遺跡出土須恵器実測図（6）	27
第 21 図 堤平遺跡出土須恵器実測図（7）	28
第 22 図 堤平遺跡出土須恵器実測図（8）	29
第 23 図 堤平遺跡出土須恵器実測図（9）	30
第 24 図 堤平遺跡出土須恵器実測図（10）	31
第 25 図 堤平遺跡出土須恵器実測図（11）	32
第 26 図 堤平遺跡出土須恵器実測図（12）	33
第 27 図 堤平遺跡出土須恵器実測図（13）	34
第 28 図 堤平遺跡出土土師器実測図（1）	36
第 29 図 堤平遺跡出土土師器実測図（2）	37
第 30 図 堤平遺跡出土土師器実測図（3）	38
第 31 図 堤平遺跡出土土師器実測図（4）	40
第 32 図 堤平遺跡出土土師器実測図（5）	41
第 33 図 堤平遺跡出土土師器実測図（6）	42
第 34 図 堤平遺跡出土土師器実測図（7）	43

第35図	堤平遺跡出土土師器実測図(8)	44
第36図	堤平遺跡出土土師器実測図(9)	45
第37図	堤平遺跡出土土師器実測図(10)	46
第38図	堤平遺跡出土土師器実測図(11)	47
第39図	堤平遺跡出土遺物実測図(1)	49
第40図	堤平遺跡出土遺物実測図(2)	50
第41図	堤平遺跡出土遺物実測図(3)	51
第42図	堤平遺跡出土遺物実測図(4)	52

図 版 目 次

図版1	上空からみた堤平遺跡 堤平遺跡遠景	14
図版2	SI-01 完掘状況 瓶形土器検出状況	15
図版3	SI-02 検出状況 布掘り建物完掘状況	16
図版4	SB-01 検出状況 彫り込みを有する岩盤2	17
図版5	彫り込みを有する岩盤2 石列1 検出状況	18
図版6	SK-07 検出状況 堤平遺跡調査状況	19
図版7	SI-01・02 出土遺物 堤平遺跡出土須恵器(1)	20
図版8	堤平遺跡出土須恵器(2)	21
図版9	堤平遺跡出土須恵器(3)	22
図版10	堤平遺跡出土須恵器(4)	23
図版11	堤平遺跡出土須恵器(5)	24
図版12	堤平遺跡出土須恵器(6)	25
図版13	堤平遺跡出土須恵器(7)	26
図版14	堤平遺跡出土須恵器(8)	27
図版15	堤平遺跡出土須恵器(9)	28
図版16	堤平遺跡出土須恵器(10)	29
図版17	堤平遺跡出土須恵器(11)	30
図版18	堤平遺跡出土須恵器(12)	31
図版19	堤平遺跡出土須恵器(13)	32
	堤平遺跡出土土師器(1)	
図版20	堤平遺跡出土土師器(2)	
図版21	堤平遺跡出土土師器(3)	
図版22	堤平遺跡出土土師器(4)	
図版23	堤平遺跡出土土師器(5)	
図版24	堤平遺跡出土土師器(6)	
図版25	堤平遺跡出土土師器(7)	
図版26	堤平遺跡出土土師器(8)	
図版27	堤平遺跡出土土師器(9)	
図版28	堤平遺跡出土土師器(10)	
図版29	堤平遺跡出土遺物(1)	
図版30	堤平遺跡出土遺物(2)	
図版31	堤平遺跡出土遺物(3)	
図版32	堤平遺跡出土遺物(4)	

第1章 調査に至る経緯と調査経過

第1節 調査に至る経緯

中国横断自動車道尾道・松江線の建設は、松江市周辺と山陽地方を結び、また中国自動車道と接続して、ネットワークを形成することにより、沿線地域の産業振興や観光開発を促進し、地域経済の発展と活性化を図ることを目的に計画された。

この計画にともなう埋蔵文化財の調査については、平成4年1月に建設省（現国土交通省）道路局長から日本道路公団に松江・三刀屋間について調査開始の指示があり、同年4月に島根県教育委員会に対して埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。しかし、調査体制が整わないので分布調査が実施できない状態が続いていたが、平成5年9月には工事実施計画が認可された。このような状況を受け、県教委では平成6年3月から分布調査を実施し、全体の9割近くを踏査した。

この調査成果をもとに、同年6月と8月に道路公団と調査の打ち合わせを行った。この打ち合せで、今回の分布調査が500m幅を対象にしているので、ルート確定後再度調査対象地を把握する必要があることや、調査事業の円滑化を図るために、用地買収、立木伐採等環境整備の充実を要望した。残りの分布調査は平成7年4月に完了し、公団へ回答した。

同年4月に日本道路公団、県教育委員会、県土木部からなる埋蔵文化財調査連絡会が発足し、8月に第1回の連絡会を開催した。この会議では平成8年度から発掘調査に入ることを前提に用地買収や立木伐採、進入路、廐上廃水処理等の調査環境整備に付いて協議を行った。その後2回の連絡会で調整し、平成8年度から調査を実施することが決定した。これを受け、調査を円滑に進めため、作業員の確保、発掘現場における物件の確保、測量、掘削工事などの調査補助業務を社団法人中国建設弘済会島根県支部に委託するため、日本道路公団、社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者による埋蔵文化財発掘調査覚書を平成8年3月26日に交わし、本格的に調査に入ることとなった。

平成9年度は、試掘調査を含め、宍道町白人谷I遺跡など7遺跡を発掘調査した。

平成10年度は、試掘調査を含め、玉湯町茂芳口遺跡など22遺跡の発掘調査を行った。

今回報告する堤平遺跡は八束郡宍道町に所在し、平成10年度に発掘調査を行ったものである。

第2節 調査経過

堤平遺跡は才の集落に向かってのびる尾根の中腹の平坦面に存在する。遺跡の発掘調査は平成10年4月13日に着手し、同年9月30日に終了するまで約6ヶ月を要した。

遺跡の存在は、平成8年発掘調査に向けての分布調査によって確認された。分布調査時遺跡の一部は木材置き場として使用されていた。この時点では堤平遺跡は地形の特徴により時期不明の集落遺跡として認識されていた。翌平成9年には試掘調査が行われ、時期不明の加工段が確認され、古墳時代前～中期の土師器、奈良時代の土師器、須恵器が多数出土した。加工段からは何らかの建物の存在が想定された。また、出土した遺物の中に鉄鉢形上器や須恵器の小型壺が数点存在したことから、この地に仏教的な要素を持つ遺構が存在する可能性が想定された。

本調査は平野面上の表土を除去する作業から着手した。これに平行して南側斜面においてトレン

チによる遺物、遺構の有無の確認を行い調査範囲の絞り込みを行った。この結果、斜面西側の斜面からは遺構・遺物の存在が確認できなかったことから全面的な掘り下げは中止された。平坦面の調査の結果 8 世紀後半以降のものと思われる布掘り建物と掘立柱建物、彫り込みを有する岩などを確認した。平坦面の精査と平行して南側の斜面の調査を行った。この地点では弥生時代末から古墳時代初頭の堅穴住居跡を確認した。事前の試掘調査により、建物群の遺構面より下層に遺構面が存在することが判明していたために、掘り下げ前の 7 月 15 日に現地説明会を行った。説明会では、遺構の解説に加え出土遺物の展示、火おこし、土器による製塩体験コーナーなどを併設し活況を呈した。

その後、平坦面を掘り下げ平成 9 年の試掘により確認された加工段が弥生時代末から古墳時代初頭の堅穴住居跡であることが判明した。同時に南側斜面東よりの地点の掘り下げを行い多数の遺物を取り上げた。また、この地点では谷から平坦面に至る張り石を有する道を確認した。

現地作業は 9 月で終了したが、報告書の作成に向けての遺物の整理を平成 10 年度以降も平行して行った。なお、彫り込みを有する岩盤の一部については米待ストーンミュージアムが切り取りを行い、同館で展示保存している。

第 2 章 遺跡の位置と歴史的環境

堤平遺跡は、島根県八束郡宍道町に所在する。

宍道町は、島根県の県庁所在地である松江市から西へ約 17km にあり、宍道湖西南端沿岸部に位置する。人口およそ 10,000 人である。北には宍道湖があり、東は八束郡大湯町、西は簸川郡斐川町、南は大原郡大東町と加茂町に接している。

733 年（天平 5 年）に書かれた地誌『出雲國風土記』（以下『風土記』と略す）から古代の宍道について多くの情報を得ることができる。それによると現在の宍道町域は、意宇郡の宍道郷（大字宍道、白石、化々布に相当）、押志郷の一部（来待地区に相当）、出雲郡建部郷の一部（大字伊志見に相当）に該当する。また宍道町佐々布付近には古代の山陰道の宍道駅があったことが推測され、古來より交通の要として栄えていたことがうかがえる。現在も町内には、鉄道では JR 山陰線、木次線が、道路では国道 9 号線、国道 51 号線が通っていて、今日に至るまで宍道町は島根県の交通の要の一つである。

宍道町においては、宍道湖に向かって北流する川によってつくられた谷平野が雙筋も認められる。その中心的なものに、佐々布川、同道川、来待川の 3 つの川による谷平野がある。その間には小さな川を中心とした谷が存在する。古代から形成されたと思われる広大な平野はみられない。そのため、古くから谷平野などが耕地や居住地として利用されている。また、米待地区では、凝灰質砂岩である来待石が産出され古墳の石棺や石室の石材として使われている。現在でも来待石は地場産業になっており、庭石などに利用されている。

調査した遺跡は、宍道湖西南端から南に約 2.0km 付近に所在し、標高約 30m の小さな谷を見下ろす尾根の中腹およびその北側斜面に位置している。遺跡の中心部は約 40×20m の人工的な平坦面となっている。

以下、時代ごとに調査・報告されている遺跡について述べてみる。



第1図 堤平遺跡と周辺の遺跡 S=1/50,000

〔旧石器時代〕

この時代は現在より気候が寒冷であり、海平面はかなり低かったと推測される。宍道町周辺は、標高が200~400m程度の丘陵を背後にひかえ、大きな谷を見下ろす北向きの丘陵地で、居住しやすい環境だったと思われる。この時代の石器は、町内では首谷遺跡の細石核1点と東来侍の久戸地区で発見された大型の石核とわずかしか認められていないが、周辺の市町村では多数の遺跡が知られている。移動しながらの生活であったと考えられるので、大きな谷をめぐる宍道湖周辺地域はひとつの文化圏であった可能性が高い。

〔縄文時代〕

この時代になると、海平面の上昇にともない海水が入り込み、沖積や砂州が発達することによって、宍道湖周辺の地形も現在に近くなったと考えられる。宍道湖周辺は、眼前に水面をひかえて水産資源に恵まれ、居住に適した環境であった。東来侍の弘長寺遺跡から出土した多数の石錘などから、海岸では漁労が行われていたと考えられる。この時代の遺跡は少ないが、弘長寺遺跡から前述の石錘のほかに石斧などの石器も出土している。近在の三成遺跡から後晩期の甕型土器が出土している。また、西来侍の伊野谷遺跡から土器が出土し、白石の野津原II遺跡から尖頭器や石鏃が出土している。

〔弥生時代〕

弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡に比べるとやや広がりをみせてくる。この時代になると、稲作が生業の中心となり、宍道町周辺でも半野部の低地に遺跡が多くみられる。各地に広がる沖積平野ごとに遺跡が展開していることから、宍道町においても来侍川流域や佐々布川流域あたりに前期の遺跡が存在している可能性が高いが、確認はされていない。

中期になると遺跡が増加するとともに、大規模な集落が宍道町周辺の各地に現れてくる。白石地区の谷に面した低丘陵地に立地している大谷I遺跡では中期後半（およそ2000年前）の土器が出土している。また、何らかの建物を建てたと思われる斜面を削りだした平坦面も見つかっており、この時期に集落が存在していた可能性が高い。

後期になると遺跡は増加する。円形の竪穴住居跡が南北に切り合い、2棟見つかっている北ヶ市遺跡が、宍道湖岸（当時）に面した弥生時代後期後半の住居跡としての好例と言える。前述の大谷I遺跡では、後期中頃（およそ2世紀頃・九重式）の土器や後期末期の土器が出土している。西側に隣接する大谷II遺跡では、後期の中頃から後半（およそ2世紀から3世紀頃）の土器が出土しており、この時期の集落があった可能性が高い。才地区の谷部を見渡せる丘陵尾根頂部から南側斜面に位置する山守免遺跡からは、後期後半の竪穴住居が4棟確認されている。そのうちの2棟の周囲には、幅50cm程の溝が巡るものである。また、床面から柱穴がいくつか見つかっており、その様子からこの遺跡の竪穴住居は、4本の主柱によって支えられたものであったと想像できる。

白石地区と才地区の境にあたる、標高90mの丘陵上に位置する野津原II遺跡からは弥生時代後期後半～末（およそ1800年前）の生活の跡が見つかった。竪穴住居が2棟、高床倉庫の跡と考えられる掘立柱建物が1棟、何らかの建物や施設を建てたと考えられる平坦面3カ所がそれである。この遺跡は、竪穴住居や高床倉庫の規模・造りから、数軒の住居が集まってひとつのまとまりとした「単位集団」が住まつた跡と考えられる。

佐々布の上野遺跡では竪穴住居跡6棟、加工段3カ所が見られる。これらのうち、竪穴住居跡

4 棟、加工段 1 カ所がこの時期のものと考えられる。隣接する上野Ⅱ遺跡からは、11 棟の堅穴建物が見つかっている。これらの堅穴建物が集落の周縁部を U 字形にめぐるように建ち並び、それらに囲まれた中央広場のような空間には多数のピットが検出されている。堅穴建物群に用まれるような造構配置から、集落共有の倉庫群である可能性が考えられる。これらの堅穴建物から多くの鉄製品が出土していることから、上野Ⅱ遺跡は鉄製品の生産に関係した遺跡と考えられ、上野遺跡も一連の集落の縁辺である可能性もある。また、上野遺跡からは、吉備地方からの搬入品と考えられる特殊壺が出土している。これは、山陰地方では弥生時代の墳墓から発見されることが多い七器で、この遺跡でも弥生時代の墳墓が存在した可能性が高い。

前述の山守免遺跡・野津原Ⅱ遺跡・上野遺跡の山上に居を構えた集落は、弥生時代においてしばしば見受けられる。弥生時代中期終わり頃（約 2000 年前）から後期後半頃（約 1800 年前）に盛んに作られる。こうした集落は「高地性集落」と言われ、弥生時代後期後半頃の全国的な争乱の波に穴道周辺も巻き込まれていたと推察することも可能ではないだろうか。

〔古墳時代の遺跡〕

古墳時代に入ると、遺跡数、遺物量とも格段に増加する。町内でも多くの古墳、横穴墓が確認されており、その多くは、来待川、同道川を中心とする河川域、宍道湖沿岸に集中する。今後の調査によりさらに増加すると思われる。

前期には、来待地区で知原 1 号墳、宍道地区で上野 1 号墳と佐々布下 1 号墳が築かれる。このうち、大型の円墳である上野 1 号墳からは斜緑神獸鏡や鉄剣、柏、豊富な玉類が出土している。杓子觀音Ⅰ古墳群第 1 号墳も墳形などからこの時期に属すると考えられる。

中期からは、宍道地区で足頭古墳群、水溜古墳群が、来待地区では横田古墳、松谷古墳群が築かれるようになる。これらの古墳は小さな谷を見おろす低丘陵上に立地し、多くの古墳群は数基から 10 基前後で構成されるが、水溜古墳群は 30 基より形成される規模の大きい古墳群である。墳丘は大部分が方墳である。また、このころから石棺の石材としてこの地域特有の来待石が使われるようになる。横田古墳の舟形石棺には、地元で「白粉石」または「白來待」と呼ばれる石英安山岩質凝灰岩が使われていて、同じ石材が使われている玉湯町の徳連場古墳、玉造築山古墳の舟形石棺との関連が注目される。

佐々布川中流域から東に延びる丘陵緩斜面に欠頭遺跡がある。この遺跡は南に前述の水溜古墳群と接し、北約 100 m には女夫岩遺跡がある。古墳時代前期から中期にかけての 5 棟の堅穴住居跡で、住居跡からは、古墳時代前期（3 世紀末ごろ）、古墳時代中期（5 世紀）の土器がそれぞれ見つかっている。住居跡群は、古墳時代の暮らしどりを示す良好な資料といえる。

後期には、横穴式石室をもつ古墳と横穴墓が築かれるようになる。同道川流域では、前方後円墳の椎山 1 号墳や、前方後円墳と推定され石棺式石室をもつ伊賀見 1 号墳、墳型は不明だがやはり同じく石棺式石室をもつ下の空古墳が造られている。石室の石材としては、この地域特有の来待石が使われている。また、横穴式石室としては、来待川流域の知原 2 号墳と同 4 号墳および鏡川流域の鏡北廻古墳などがある。鏡北廻古墳の石室も来待石の加工によるもので、閉塞石の門状の浮き彫りは当時の加工技術の高さがうかがわれる。

山守免遺跡の南側斜面からは、斜面を平坦に加工した後に掘立柱建物 8 棟と堅穴住居跡が 1 棟見つかっている。いずれも、古墳時代後期の前半（6 世紀前半）頃のものと考えられ、土師器、須

恵器などが出土している。また、上野Ⅱ遺跡からは古墳時代中期の竪穴建物跡が5棟見つかっている。そのうちの1棟から玉・坏・蓋が出土し、他の1棟からは、鍛冶炉を伴う住居跡が見つかっている。

横穴墓は、弘長寺横穴群、才横穴群等多数の遺跡があり、主に河川を臨む中流域及び宍道湖に向した低丘陵に広く分布している。宍道町において横穴墓の玄室形態をみてみると、隣接する簸川郡や大原郡のものとは構造上タイプを別にしている。簸川郡には三角断面妻入りアーチ形が多くみられ、大原郡には三角断面妻入りを呈するものが多い。それに対して、宍道町では小地域ごとに平面プラン、天井形態などまとまりがみられるものの、形態的に混在した地域となっている。さらに、石材として、この地域特有の米待石を横穴式石室に利用したり、米待石の岩盤に横穴墓を掘ったりしている。

〔奈良・平安時代の遺跡〕

律令時代になると、「風土記」にその様相を知り得ることができる。前述のように宍道に関しては、古代山陰道が設けられ、佐々布付近と推定される場所に宍道駅があったことが書かれている。特に宍道に関する記載の部分には、宍道の地名伝承や「犬岩・猪岩」の記述があるが、現在もその比定に關係する巨石が存在し、女大岩遺跡や石宮神社にある巨石がそれと考えられている。

この時代の遺跡としては、荻山遺跡と小松古窯跡群がある。荻山遺跡は、出雲平野に面する谷間の緩斜面に所在する。古墳時代中期から平安時代初めにかけての集落跡で6棟の竪穴住居跡が見つかっている。なお、遺跡内には多くの柱穴が確認されているので、平地に建てられた掘立柱による建物跡が数棟存在すると推定される。6棟の住居跡のうち、1棟の住居跡から鍛冶洋や繩の羽口が、他の1つの住居跡から鍛冶炉が認められている。宍道湖周辺では貴重な鍛冶造構であり、宍道湖岸近くの鍛冶炉をもつ集落遺跡である。西来寺の小松古窯跡群は、平安時代初め頃の須恵器窯跡で、窯3基と灰原などを見つかっている。この遺跡で須恵器が焼かれた時期は、松江市の人井古窯跡群での須恵器の集中的な生産が終息する時期であり、古代の手工業生産の体制を考える上で意義がある。

〔中世から近世の遺跡〕

中世になると、宍道地区と米代地区的山間を中心として山城が築かれるようになる。応仁年間の頃よりこの地方で勢力を誇っていたのが宍道氏である。その宍道氏が本拠地として築いたのが金山要害山城である。その山城は、標高148m、比高130mという雄大な山塊を利用した、四十八城といわれるくらい数多くの曲輪をもつものである。交通路から考えれば南部の大原郡方面への通路にあたり、湖岸と湖上を利用して東西方面への進出も便利なところに位置している。金山要害山城のほかにも宍道要害山城、佐々布要害山城など、山城が数多く築かれており、国人として活躍していた宍道氏の勢力をうかがい知ることができる。

中世から近世にかけては、米待石が貴重な石造物の石材として用いられるようになる。なかでも、室町時代の終わりごろから織豊政権期にかけて、その利用が急増しており、五輪塔や宝篋印塔などの石塔や石仏像が中心に残っている。また、このような石材を切り出していた石切場の遺跡が点在しており、三反山遺跡をはじめとする来待石切場遺跡群の調査により、江戸時代以来の採石方法が明らかになった。

以上のように宍道町一帯は、弥生時代以降の遺跡を中心に数多く遺跡が残されている。これまで

の調査で明らかになった遺跡の実像と地理的な要因から、この地域は古くから東部出雲と西部出雲、そして奥出雲の交通路の要としての役割を持ちながら、周辺の地域とともに文化が発展してきたといえよう。

参考文献

ト部吉博	1983『小松古窯跡群範囲確認調査報告書』	宍道町教育委員会
福山 誠	1988『水溜古墳群』	宍道町教育委員会
山根正明	1992『宍道町の山城』	宍道町教育委員会
西尾克己ほか	1993『宍道町歴史資料集（古墳時代編Ⅰ）』	宍道町教育委員会
島根県埋蔵文化財調査センター		
	1997『上野遺跡現地説明会資料』	島根県教育委員会
川原和人 ほか	1998『来待石切場遺跡群』	島根県教育委員会
西尾克己 ほか	1998『出雲国風土記にみる宍道町』	宍道町教育委員会
丹羽野 裕ほか	1998『宍道町歴史叢書 3』	宍道町教育委員会
丹羽野 裕ほか	1999『宍道町史【史料編】』	宍道町史編纂委員会
	2001『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅸ』	島根県教育委員会

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	堤平遺跡	住居跡	27	伊志見一里塚	一里塚	53	大野御跡	製鉄遺跡
2	勝負桑Ⅰ遺跡	城跡・古墳	28	天石・猪石	祭祀遺跡	54	大紋古墳	古墳
3	白石大谷Ⅱ遺跡	住居跡	29	三成道跡	散布地	55	草の上東遺跡	散布地
4	シトギ免遺跡	古墳	30	中坂道跡	散布地	56	塙畠遺跡	散布地
5	野津原Ⅱ遺跡（東区）	住居跡	31	三成古墳群	古墳	57	草の上遺跡	散布地
6	山守免遺跡	住居跡	32	越北國古墳	古墳	58	松石横穴	横穴
7	石地廻遺跡	石造仏	33	高松古墳群	古墳	59	松石遺跡	散布地
8	弘長寺遺跡	散布地	34	佐久多神社裏古墳群	古墳	60	松石古墳群	古墳
9	平田遺跡	散布地	35	菅原横穴群	横穴	61	明寿延古墳群	古墳
10	栗屋山横穴群	横穴	36	佐倉未の廻横穴群	横穴	62	明寿延遺跡	散布地
11	佐倉横穴群	横穴	37	伝大野次郎左衛門の墓	古墓	63	多井古墳群	古墳
12	西来待横穴群	横穴	38	大森經廢	経塚	64	寺谷遺跡	散布地
13	弘長寺横穴群	横穴	39	金山五輪塔群	古墓	65	寺谷北遺跡	散布地
14	椎山古墳群	古墳	40	昔門院跡	寺跡	66	多井北遺跡	散布地
15	下の空古墳	古墳	41	宍道櫻岩山城跡	城跡	67	多井遺跡	散布地
16	弘長寺古墳	古墳	42	鶴東城跡	城跡	68	知原古墳群	古墳
17	伊賀見古墳群	古墳	43	久戸千体地蔵	廟崖仏	69	清水谷古墳群	古墳
18	萩古墳	古墳	44	大野原古墳	古墳	70	矢頭遺跡	横穴・散布地
19	才古墳	古墳	45	才横穴群	横穴	71	般音寺横穴	横穴
20	OM公園横穴	横穴	46	女ノ詩横穴	横穴	72	足頭古墳群	古墳
21	金山要塞山城跡	城跡	47	坪の内古墳	古墳	73	水溜古墳群	古墳
22	佐々布要塞山城跡	城跡	48	菅原金屋子御跡	製鉄遺跡	74	隨音寺横穴群	横穴
23	伝塙治高貞首塚	古墓	49	上來待カナクソ谷御跡	製鉄遺跡	75	大門遺跡	散布地
24	伝土御門親王墓	古墓	50	小松古窯跡群	窯跡	76	庄廻遺跡	散布地
25	佐々布Ⅰ遺跡	散布地	51	萩田遺跡	住居跡	77	岩穴遺跡	散布地
26	佐々布Ⅱ遺跡	散布地(所在不明)	52	伊野谷遺跡	散布地	78	荒神谷遺跡	散布地

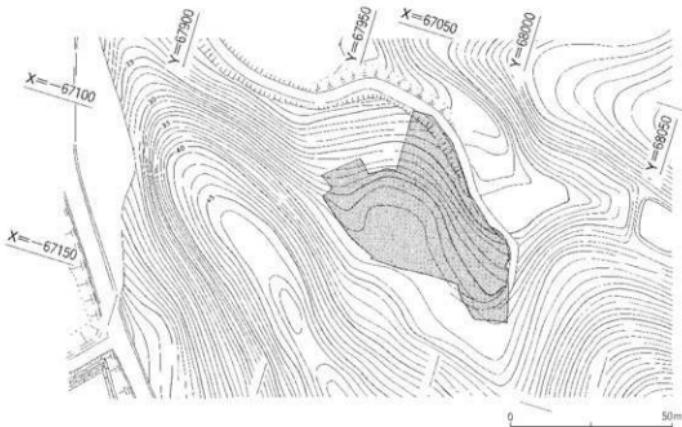
番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
79	水行遺跡	散布地	133	ハッ面遺跡	散布地	187	六反田遺跡	散布地
80	高狭遺跡	散布地	134	船分遺跡	散布地	188	外堀内進跡	散布地
81	家の下遺跡	散布地	135	段原遺跡	散布地	189	原田遺跡	散布地
82	下多井遺跡	散布地	136	伊ノ坂遺跡	散布地	190	佐賀利遺跡	散布地
83	立平遺跡	散布地	137	東カナヘ堀遺跡	散布地	191	向原遺跡	散布地
84	前田遺跡	散布地	138	カナヘ堀遺跡	散布地	192	篠原遺跡	散布地
85	羽山遺跡	散布地	139	宇由比神社古墳	古墳	193	掛鹿山城跡	城跡
86	明寿祖東遺跡	散布地	140	四つ口古墳	古墳	194	佐々布下古墳群	古墳
87	竹の下遺跡	散布地	141	イヅレ遺跡	散布地	195	中屋敷遺跡	散布地
88	寺谷西遺跡	散布地	142	下白石遺跡	散布地	196	大畑ヶ遺跡	散布地
89	三成上遺跡	散布地	143	平井西遺跡	散布地	197	城山城跡	城跡
90	板広遺跡	散布地	144	後原遺跡	散布地	198	西屋敷遺跡	散布地
91	日吉遺跡	散布地	145	高瀬跡	散布地	199	竹ノ船遺跡	散布地
92	舟山遺跡	散布地	146	萩原跡	散布地	200	矢谷下遺跡	散布地
93	水頭遺跡	散布地	147	新江遺跡	散布地	201	救手遺跡	散布地
94	高平遺跡	散布地	148	空連跡	散布地	202	矢谷上遺跡	散布地
95	山根遺跡	散布地	149	長焼遺跡	散布地	203	岩穴畠遺跡	散布地
96	巣治屋遺跡	散布地	150	坪の内遺跡	散布地	204	御崎古墳群	横穴
97	藏敷遺跡	散布地	151	平屋敷遺跡	散布地	205	屢敷古墳群	古墳、横穴
98	西細遺跡	散布地	152	上西遺跡	散布地	206	椎ノ木庭古墳群	古墳
99	藏の前遺跡	散布地	153	ホウジ遺跡	散布地	207	小界古墳	古墳
100	織部古墳群	古墳	154	ホウジ向遺跡	古墳	208	小佐々布古墳群	古墳
101	平治割遺跡	散布地	155	五反田遺跡	散布地	209	鹿田遺跡	散布地
102	大森城跡	城跡	156	イナエソ遺跡	散布地	210	北ノ削遺跡	散布地
103	大畑遺跡	散布地	157	椎山遺跡	散布地	211	ソラ田遺跡	散布地
104	大坊遺跡	散布地	158	鶯道跡	散布地	212	小佐々布横穴群	横穴
105	清水尻遺跡	散布地	159	北垣尻遺跡	散布地	213	原添遺跡	散布地
106	常命壽遺跡	散布地	160	北延遺跡	散布地	214	寺ノ前遺跡	散布地
107	柴木田遺跡	散布地	161	松木田遺跡	散布地	215	圓田遺跡	散布地
108	岩屋遺跡	散布地	162	上後ヶ市遺跡	散布地	216	上ソリ田遺跡	散布地
109	戸横遺跡	散布地	163	鴨田遺跡	散布地	217	上遺跡	散布地
110	角田古墳群	古墳	164	宮原遺跡	散布地	218	加茂分遺跡	散布地
111	角田横穴群	横穴	165	荒田遺跡	散布地	219	イヤ谷遺跡	石切場
112	紺屋田遺跡	散布地	166	カシック古墳	古墳	220	大畑遺跡	石切場
113	金子遺跡	散布地	167	小崎廻遺跡	散布地	221	小三才谷溝跡	石切場
114	半ノ田遺跡	散布地	168	後谷横穴	横穴	222	川岡遺跡	石切場
115	沢田尻遺跡	散布地	169	元葉箭遺跡	散布地	223	地藏院遺跡	石造仏
116	ハゲの前遺跡	散布地	170	山の神谷横穴	横穴	224	勝負廻Ⅱ遺跡	石切場
117	上本郷遺跡	散布地	171	石窓口横穴	横穴	225	堀田ノ谷遺跡	散布地
118	四斗尻遺跡	散布地	172	打越遺跡	散布地	226	長廻遺跡	石切場
119	木実田遺跡	散布地	173	能登堀遺跡	散布地	227	三反田遺跡	石切場
120	中村遺跡	散布地	174	上野原遺跡	散布地	228	ゴンフ遺跡	石切場
121	反田遺跡	散布地	175	香の木遺跡	散布地	229	白石大谷Ⅰ遺跡	古墳、段築、台塚
122	鹿掘遺跡	散布地	176	深坪遺跡	散布地	230	女夫岩遺跡	祭祀遺跡
123	土井遺跡	散布地	177	小宮田遺跡	散布地	231	女天岩西遺跡	古墳
124	堂床遺跡	散布地	178	向野原遺跡	散布地	232	上野遺跡	古墳、住居跡
125	横見古墳群	古墳	179	下野原遺跡	散布地	233	海部城跡	城跡
126	椿塔遺跡	散布地	180	八斗久保遺跡	散布地	234	長辻古墳群	古墳、横穴
127	鶴崎福古墳	古墳	181	横町横穴群	横穴	235	上野Ⅱ遺跡	住居跡
128	約場遺跡	散布地	182	横町遺跡	散布地	236	物三場遺跡	火葬墓
129	宮の前遺跡	散布地	183	穴庭要害山古墳	古墳	237	ラント遺跡	散布地
130	桟田古墳	古墳	184	複題遺跡	散布地	238	荒煙遺跡	散布地
131	大前遺跡	散布地	185	西代遺跡	散布地	239	野添遺跡	中世墓
132	樋橋遺跡	散布地	186	長堀古墳	古墳	240	北ヶ市遺跡	住居跡

第3章 調査の概要

堤平遺跡は丘陵中腹の平坦面とその北側の斜面からなっている。

平坦面の範囲は最大幅約26m、最大長約42mの不整台形状の平坦面で面積は約750m²を測る。標高は約31~32mで谷からの比高差は約16mである。調査開始時に斜面を背にした西側には斜面から北に向けて伸びるように幅3m、長さ12m、高さ50cm程度の土手状の盛り土があり、近世以降に建物が建っていた可能性も考えられる。

表土を約30cm掘り下げた面で、8世紀後半以降のものと思われる、布掘り建物跡、掘立柱建物跡、土坑及びピット群、彫り込みを有する岩などが確認されている。この面からさらに約70cm掘り下げた面で弥生時代末から古墳時代初期の竪穴住居跡が確認されている。平坦面上から出土した主な遺物としては、上層で銅製容器片、下層では住居跡の床面で楕円形土器などが挙げられる。北側斜面はトレンチ調査により遺構・遺物の確認された範囲（北西方向及び北方向から東方向にかけての部分）の本調査を実施した。面積約2500m²を測り、標高差は最大で約7mを測る。斜面東側では黄色の砂層が、西側では黄褐色の礫混じりの層が地山を形成している。北方向部分の傾斜変換点付近で古墳時代前期の大型の竪穴住居跡を確認した。また、東側では平坦面に至る通路状のカット面に沿った張り石を確認した。主な遺物としては、堅穴式住居跡に伴う土器、平坦面から転落したと考えられる8世紀後半の土器類などが出土している。次章以降詳細を述べる。



第2図 堤平遺跡調査前地形図 S=1/1,500



第3図 造構配置図 S=1/300

第4章 堤平遺跡の調査

第1節 検出した造構

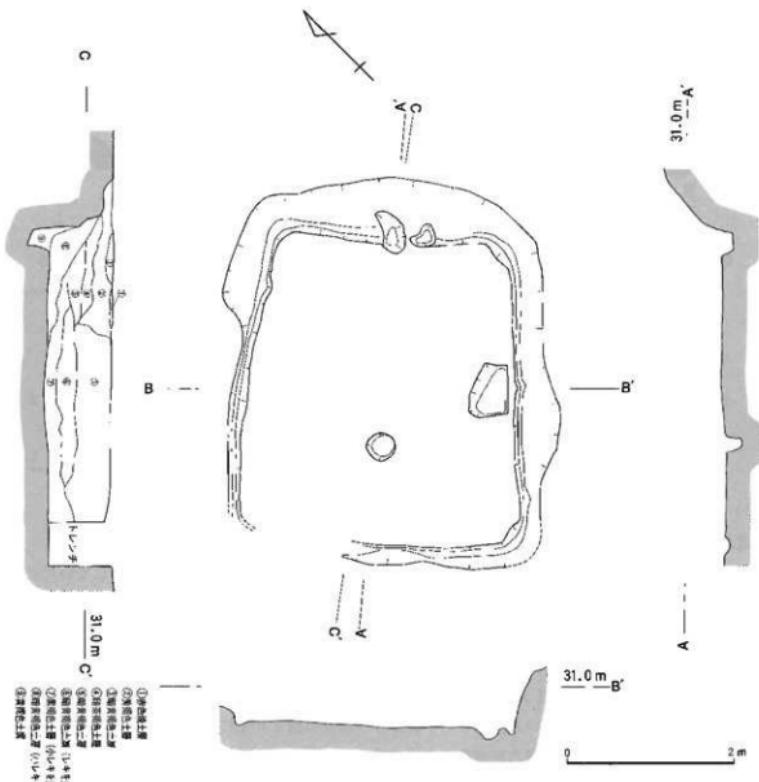
検出された造構について堅穴住居跡、掘立柱建物跡、布掘り建物跡、彫り込みを有する岩盤、石列の順で述べていく。

(1) SI-01 (第4図)

平坦山の南西縁から北東へ約 6 m に位置している。

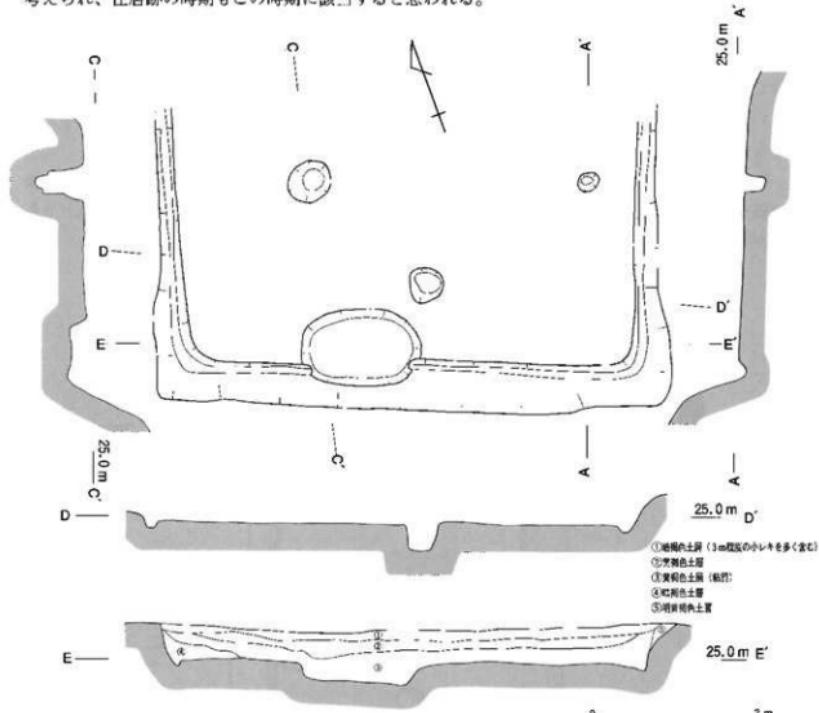
平面形は、隅丸長方形を呈しており、規模は長さ4m、幅4.8m、深さ81cmを測る。柱は径36cm、深さ24cmのP1が検出されたのみであった。南東壁から10cmの位置に幅42cm、長さ60cm、深さ18cmの平面台形状の土坑が検出されたが、機能などは不明である。北東壁中央付近には、径36cm、深さ20cm、径32cm、深さ16cmのピット2基が確認されたがその位置から、柱穴として機能していたとは考えにくい。また北東壁沿いには床面には壁沿いに幅10cm、深さ10cm程度の溝が廻っている。この溝は住居跡の南西隅でとされているが、これは試掘調査時のトレンチにより削平されたもので、本来は溝が一周していたものと思われる。

出土遺物には壺片・壺型土器がある。第6図-1~3は、複合口縁をもつ壺である。1は口縁が緩やかに立ち上がり、タガの部分には2条の凹線が巡っている。2・3は口縁が直立気味に立ち上がり、タガは突出している。



第4回 SI-01 実測図

6の瓶形土器は床面直上で検出された。器形はいびつな円筒形で口縁より2cm下の位置に1条のタガが巡り、10cm下の位置に取っ手を2つ持つものである。器高は58.8cmを測る。表面にはハケによる調整が施されている。これらの遺物の時期は、弥生時代後期から古墳時代初頭のものと考えられ、住居跡の時期もこの時期に該当すると思われる。

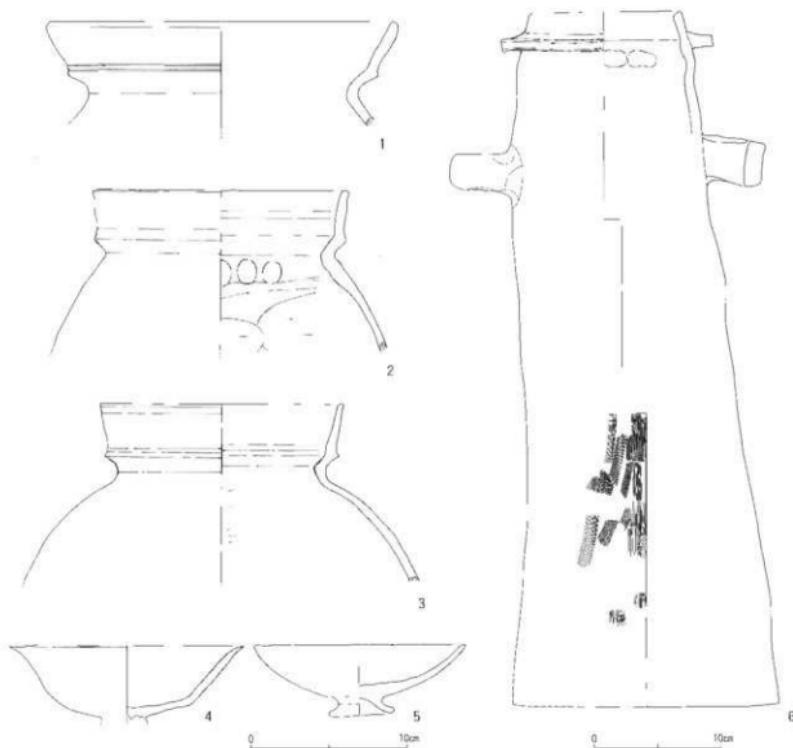


第5図 SI-02 実測図 S=1/60

(2) SI-02 (第5図)

北側斜面北西部調査区北縁から4.8mに位置している。

斜面下方は流失により一部失われていると考えられる。本来の平面形は長方形を呈していたと思われ、規模は残存部分で長さ6.2m、幅4.2m、深さ40cmを測る。柱はP1及びP2が検出されているのみである。P1は径40cm、深さ60cmで、P2は径21cm、深さ34cmを測る。南壁より中央付近で土坑を検出したがその位置等から住居跡に伴う柱穴とは判断しなかった。床面には壁沿いに幅24cm、深さ10cmの溝が廻っている。南壁中央付近には長さ1.4m、幅90cm、深さ27cmの平面形楕円形の土坑が検出されている。切り合ひ関係から前述の溝より先に掘られていたものと思われ、住居跡に伴うかそれ以前の遺構の可能性がある。住居跡に伴うとすれば、玉作工房跡等にみられる壁際土坑のように特殊な機能を持った土坑の可能性もある。



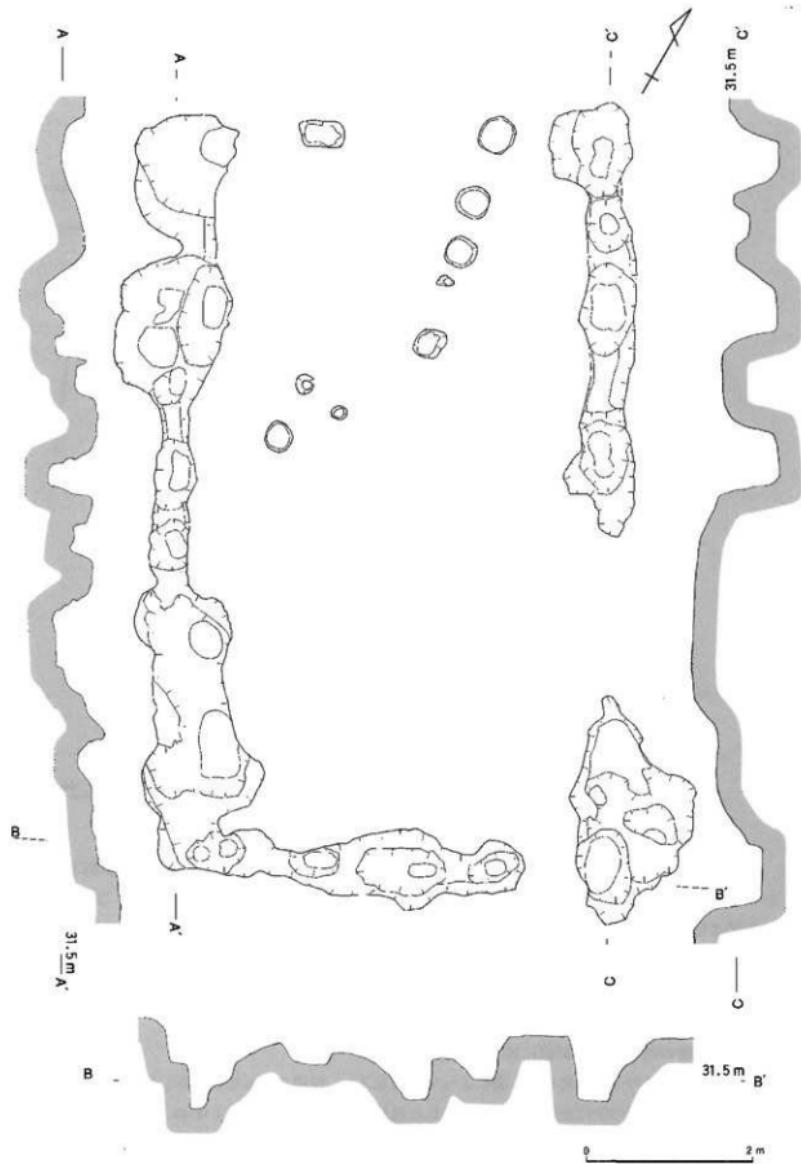
第6図 SI-01出土遺物 実測図 S=1/3・1/4

出土遺物には高環及び低脚環がある。第6図-4は、高環の環部の被片である。体部は口縁に向かい緩やかに外反している、底部外面に棒状の工具による刺突痕を有するものである。5は低脚環で体部はなだらかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く收める。4・5ともに床面より検出されており、これらの遺物よりこの住居跡が弥生時代末から古墳時代初頭の時期の遺構であると考えたい。

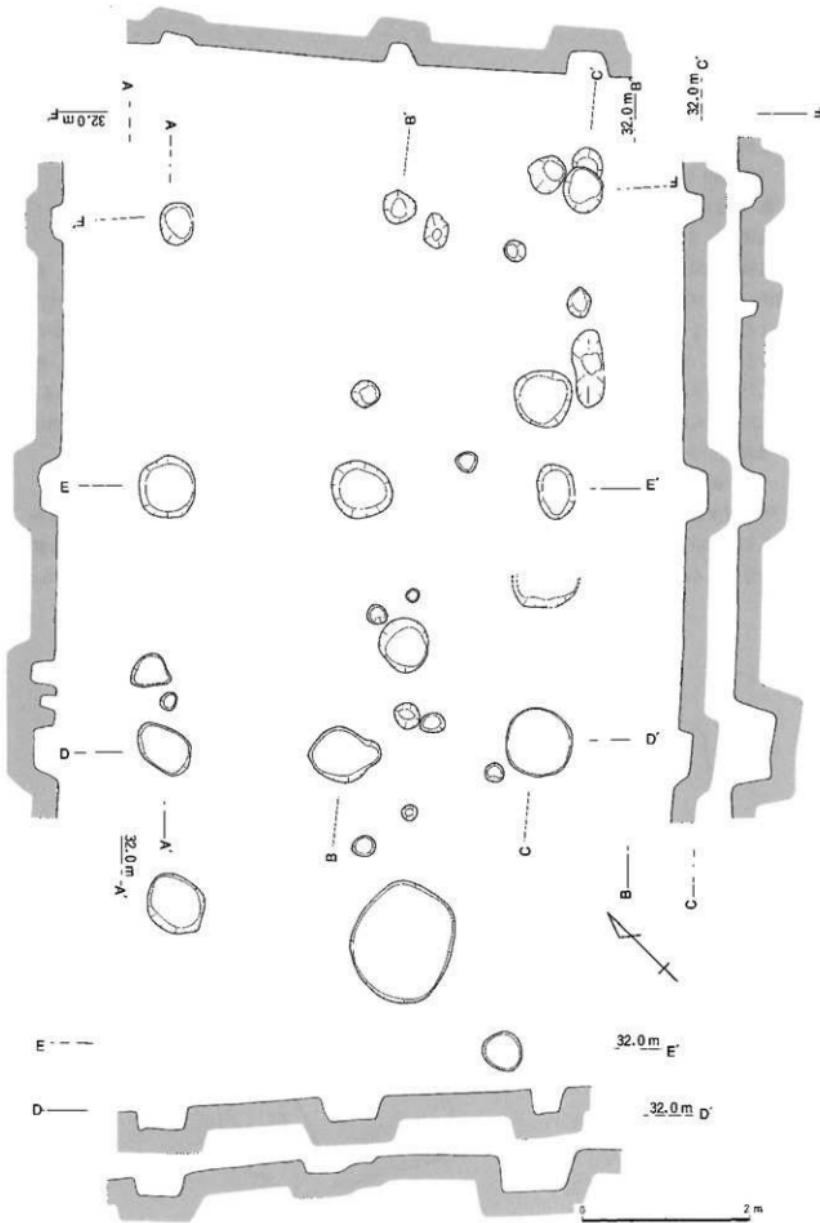
(3) 布掘り建物跡（第7図）

掘立柱建物の西側、南側斜面に接して位置している。

北西辺と北東辺の一部を欠くが、溝によって長辺9.3m、短辺6.3mの長方形に区画された部分が検出された。その溝の中に上坑状に深掘りされた部分が確認されたためにいわゆる「布掘り建物」跡であると判断した。溝は幅30cm~1.5m、深さ18cm~108cmを測る。溝の中の上坑状の部分は22か所を数え、これらをすべて柱穴もしくは柱の抜き取り痕と考えれば相当回数の建て替えが想定される。溝に囲まれた部分にもピット及び土坑が9基確認されている。これらもこの場所に存在した建物の1構成要素であったと考えたい。柱の本数、柱間等は現状では不詳というしかない。柱穴内



第7図 堤平遺跡 布掘り建物実測図 S=1/60



第 8 図 堤平遺跡 SB-01 周辺実測図

S = 1 / 60

からは、上部の小片が出上っているが、時期及び器種を判定することはできなかった。しかし、平坦面を広く覆い、この遺構の床面の覆土でもある黄褐色土層から8世紀後半から11世紀にわたる上器が出上していることから、この遺構も当該時期のいすこかに存在していたものと考えられよう。

(4) SB-01 (第8図)

第1地点西よりの中央付近で検出された掘立柱建物跡である。

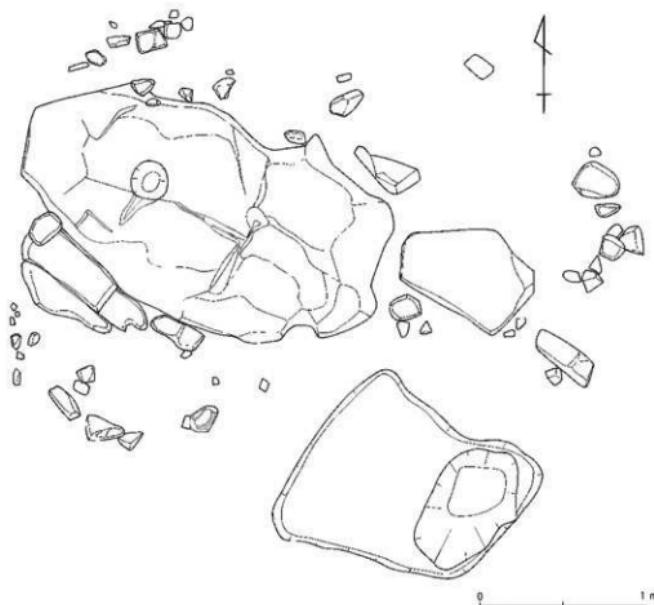
現状から2間×3間の縦柱の建物と考えられる。

建物の規模は桁行き8.6m、梁行き5mを測る。柱穴の形態は円形及び楕円形を呈しており、長軸径で48~90cm、深さ18~48cmを測る。南東に隣接する土坑は非常に浅く(深さ10cm前後)柱穴とは考えにくい。また土色の観察から被熱により変色しているものと思われる。これらのことからこの土坑が、火を使用する何らかの作業の作業場として機能していた可能性を指摘しておきたい。確認した桁行きは3間8.6mだが、本来もう1間存在し、前述の土坑が室内にあった可能性がある。

柱穴内からは遺物を検出していないが、前述の布掘り建物跡と同様の理由から当建物跡の時期は8世紀後半から13世紀までの時期としておきたい。

(5) 彫り込みを有する岩盤1 (第9図)

平坦面南辺付近中央部で確認された。岩盤自体は調査開始時点では露出していたが、その後の精査により岩盤中央部付近に円形の人工的な彫り込みを有することが確認された。岩盤の遺構面上の露出部分は2.4m×1.3m、高さ30cmを測る。彫り込みは、径24cm、深さ10cmのほぼ正円形を呈する。



第9図 堤平遺跡 彫り込みを有する岩盤1 実測図

S=1/30

この彫り込みに周辺の建物群を飾るための幡等の「のぼり」を立てるための支柱が立てられていた可能性も考えられる。

(6) 彫り込みを有する岩盤 2 (第10図)

平坦面東側北寄りの位置で検出された。幅1.9m、長さ1.8mの不整方形で遺構面からの高さ20cmを測る。彫り込みは岩盤の南隅付近に2か所、中央付近に2か所掘られており、岩盤の表面にはノミ痕が認められる。

南隅の彫り込みは36cm×24cmの長方形を呈しており、深さは16cmを測る。彫り込み確認時に、石によって蓋がされていたが詳細は不明である。中には黒色土が充填されており、中から植物の種子が2点検出された。

東辺中央部付近の彫り込みは32cm×16cmの楕円形で深さ3cmと浅いものである。北側が浅く、南側に向かって深くなっている。

中央付近の2か所の彫り込みはともに「三日月型」の平面形で深さは約2cmを測り、北側の彫り込みは長さは12cm、幅は4cm、南側の彫り込みは長さ14cm、幅4cmであった。この岩盤彫り込みの機能については不明といわざるをえないが、南隅の長方形の彫り込みを「舍利孔」と見立てて、この地点に小型の木造塔が存在した可能性が指摘されている¹⁰。



第10図 堤防遺跡 彫り込みを有する岩盤 2 実測図 S=1/40

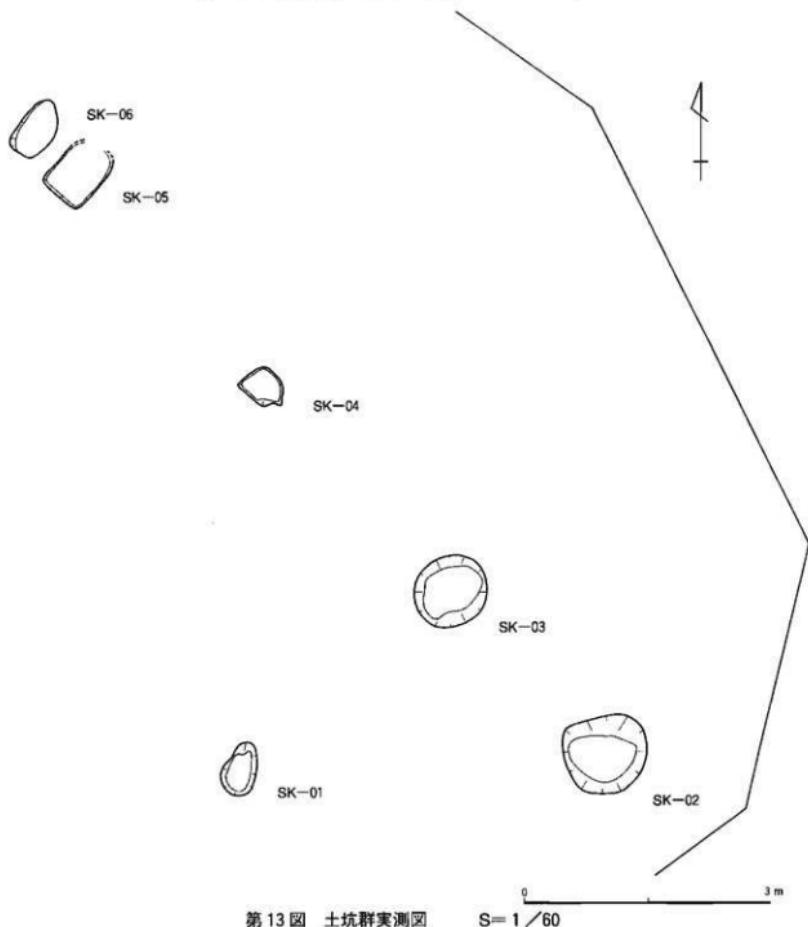
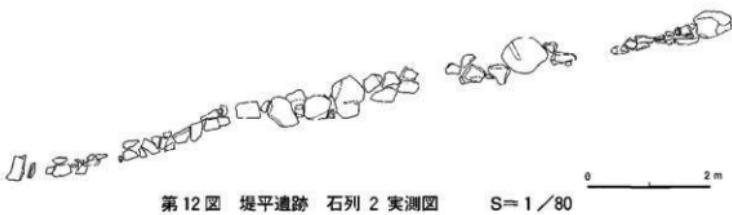
(7) 石列 1 (第11図)

平坦面東側の北縁に沿って位置している。

6cmから50cm大の34個の自然石によって構成されている。全長は5.1mを測る。その位置から、平坦上の8世紀後半以降の建物群を含む平坦面と北側斜面との境界を示すものとして存在していたことが想定される。石列に直交する形で平坦面及び斜面の境の部分にトレーナーを入れ、遺構の時期の確定を試みたが遺物などは検出されなかった。このため、この石列1及び次に述べる石列2が近代以降の建物に伴っていた可能性も無視できない。

(8) 石列 2 (第12図)

北側斜面東側中腹から、平坦面付近まで伸びている。16cmから80cm大の63個の自然石によって構



成され全長は 12 m を測る。石列に沿って谷側に約 1 m の幅で傾斜が緩くなる部分が存在し、ここが平坦面と谷を行き来するための道として機能していた可能性が考えられる。石列 1 について述べたように今回検出された遺構に伴うものは定かではない。

(9) 七坑群（第 13 図）

北側斜面東側北辺付近で検出された。6 基からなるが、いずれも浅いもので、遺物の出土はみられず、性格等は不明である。

SK-01

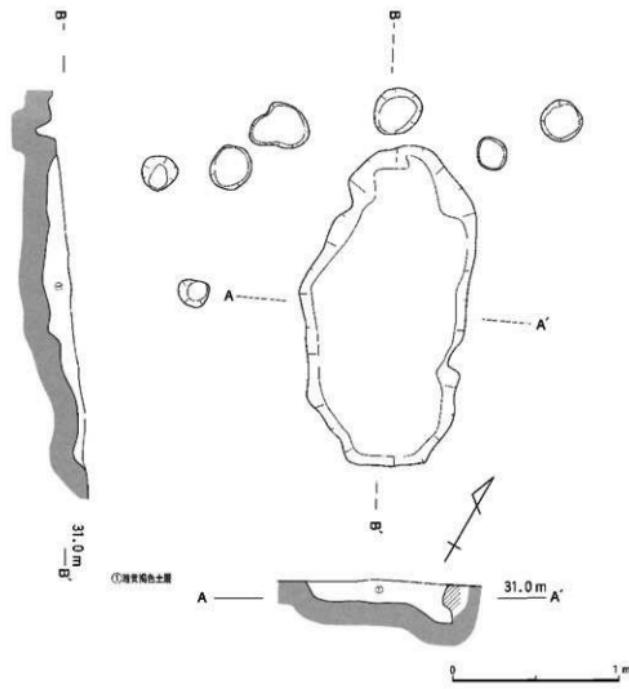
平面形は不整円形を呈し、径 102cm、深さ 36cm を測る。

SK-02

平面形は不整楕円形を呈し、長径 72cm、深さ 42cm を測る。

SK-03

平面形は不整円形を呈し、径 96cm、深さ 18cm を測る。



第 14 図 SK-07 実測図 S = 1 / 30

SK-04

平面形は不整方形を呈し、48cm×54 cm、深さ 11cmを測る。

SK-05

平面形は北東方向の 1 邊を欠くが本来は不整方形を呈していたものと思われる。84cm×60 cm、深さ 14cmを測る。

SK-06

平面形は不整梢円形を呈し、72cm×54cm、深さ 16cmを測る。

(10) SK-07 (第 14 図)

SB-01 の北東隣で検出された土坑で、隅丸長方形を呈する。埋土は基本的には暗黄褐色土層 1 層である。長さ 2 m、幅 1 m、深さ 20 cm である。



堤平遺跡調査風景

第2節 出土遺物

遺構出土以外の遺物について一括して述べる。

須恵器

蓋坏 第15図-1~7

1~3は蓋で口径は約13.5cm、天井部は高くて丸いタイプである。1・3の調整は回転ヘラケズリである。4~7は坏である。このうち5~7は底部に回転ヘラケズリを施す。7は口径11cmを測り口縁端部内側に稜を持つ物である。

高坏 第15図-8~12

8は外前に突帯が廻るもので、9~11はすかしが2方にあるものだと思われる。

鉢 第15図-13~16

13~16は鉢である。このうち15以外は口縁部にかえりを持つ物である。16は口径31.5cmを測り、胴部に取手の痕跡と調整痕を持つものである。

鉄鉢型土器 第16図

1~5・7・8・10は口縁端部にかえりをもつものである。このうち2と8は完形に復元可能ななもので2は口径20cm・器高12.1cm、8は口径18.9cm・器高11cmを測る。

蓋 第17図

1は輪状つまみを持ち口縁端部内側にかえりがつかないタイプである。2~12は天井部が丸くカーブを描いて口縁端部に至るタイプである。13~20・23~25は天井部が平らで口縁部近くで屈曲するタイプである。26は天井部に輪状つまみと突帯をもち、口縁部内側にかえりがつくものである。このタイプは出雲国庁跡の調査で出土しており、第5形式に位置づけられている^⑨。31は輪状つまみを持ち、天井部が平らで口縁端部が垂直に垂れ下がったタイプで、転用鏡として使用された痕跡がある。

高台付きの坏 第18図

13~14は高台が外方に張り出し体部が内湾するタイプである。1~12は体部が直線的に立ち上がり、高台は低いタイプである。このうち9は底部外面中央付近に「火」という墨書きを持つ。

坏 第19図~21図

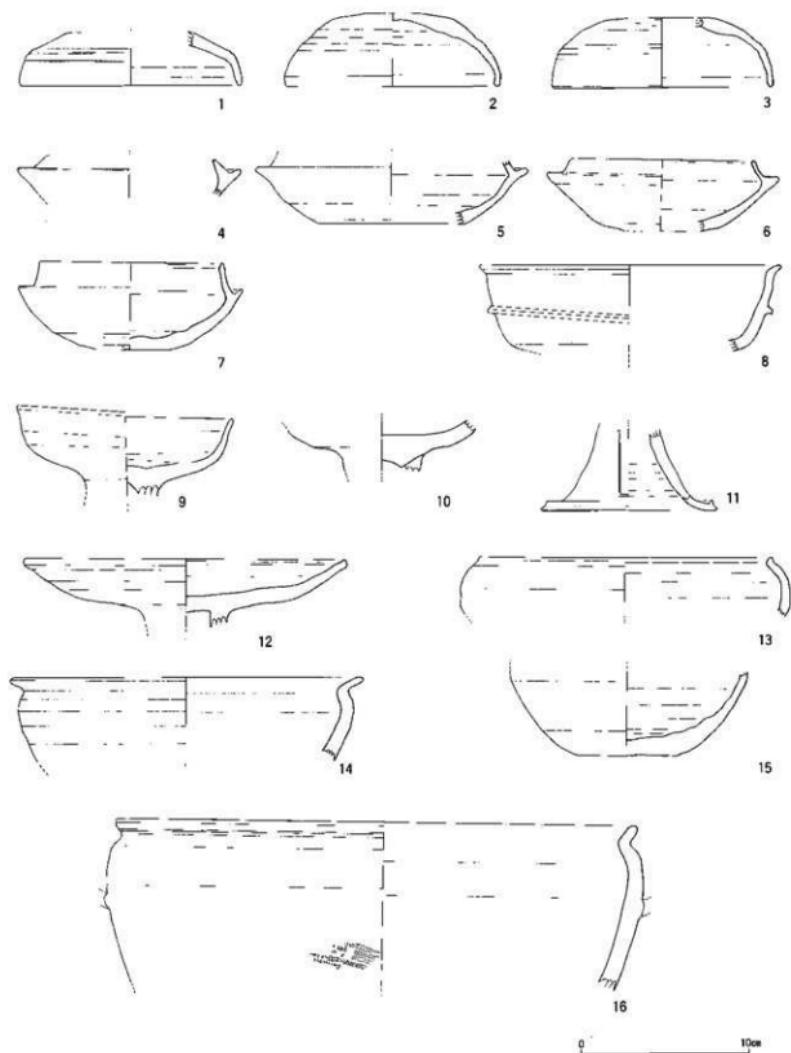
いずれも口径8.7cm~14.1cmのもので、底部を欠くものもあるが、回転糸切り調整のタイプである。このうち31~46は口縁端部が外反するタイプである。第21図-12・13はこのタイプのうち小型に属するもので12の口径は9cm・13は8.7cmを測る。第19図-4、第20図-16、第21図-8は口縁部から体部にかけて煤が付着している。

小型坏 第22図

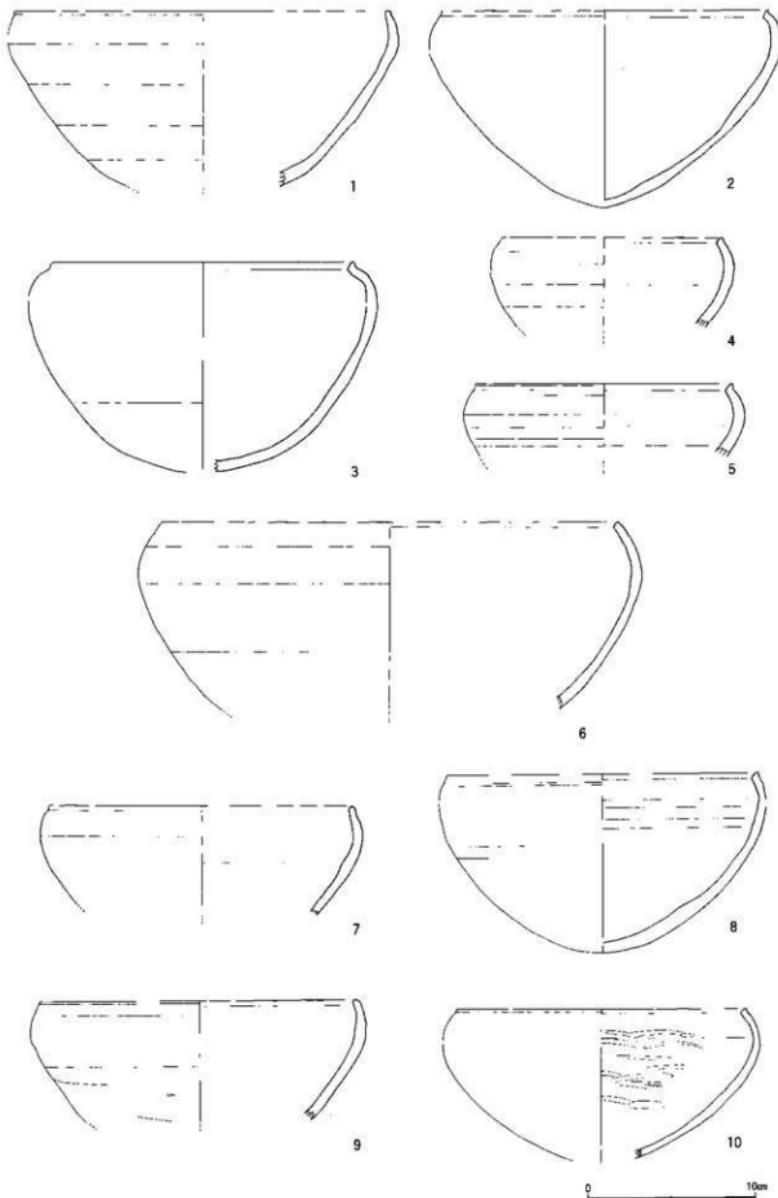
口径7.5cm~11.1cmの浅い小型の坏である。磨滅・欠損等により不明なものもあるが、これらも回転糸切り調整を施すものである。3・5・8・17・20・25は内面に煤の付着があるものである。これらの遺物は仏教関連跡からの出土が認められ、何らかの祭祀行為に使用された器種であるとの指摘がある^⑩。

皿 第23図

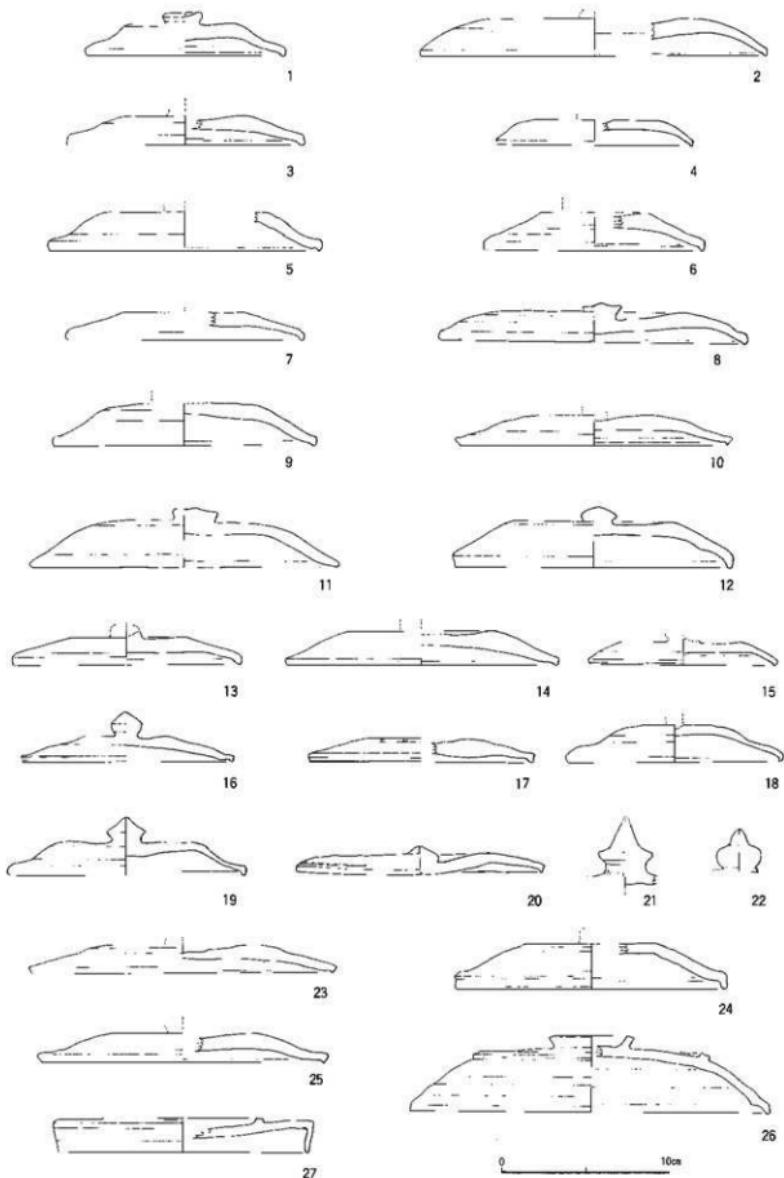
口径の分るもので10.3cm~16.2cmを測る。19は底部外面に墨書きをもつもので「佐太?」と読める。



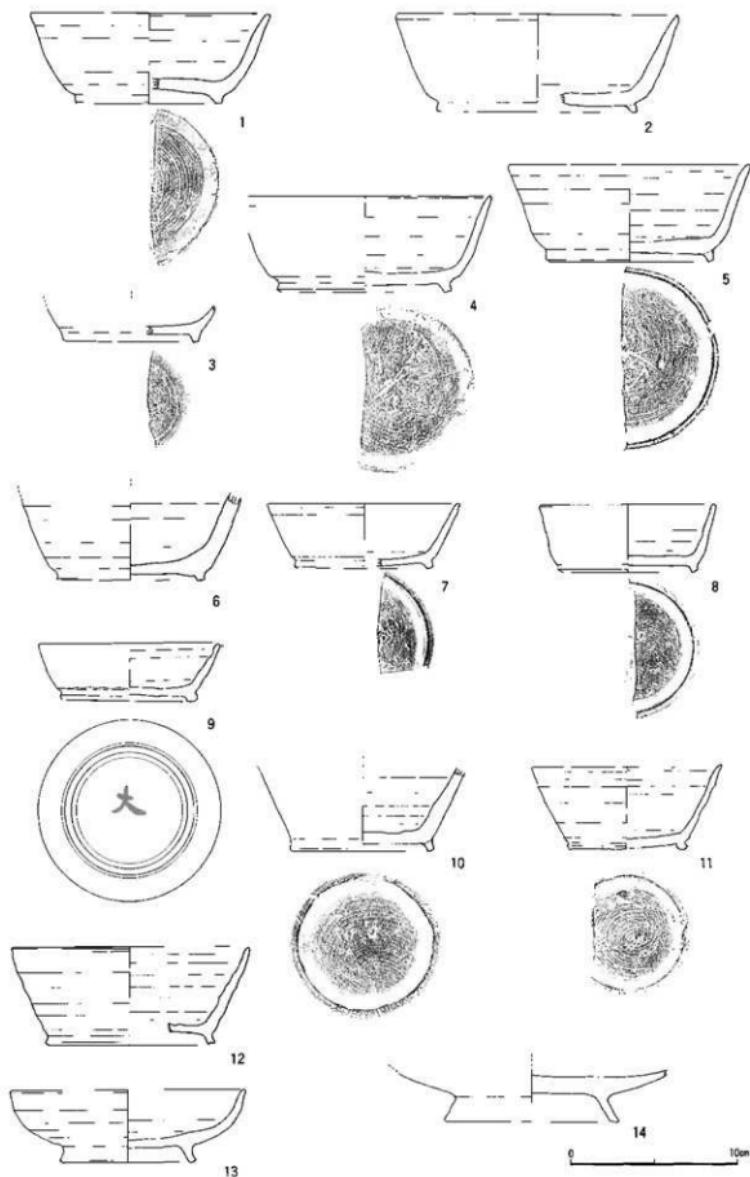
第15図 堤平遺跡出土須恵器実測図 S=1/3



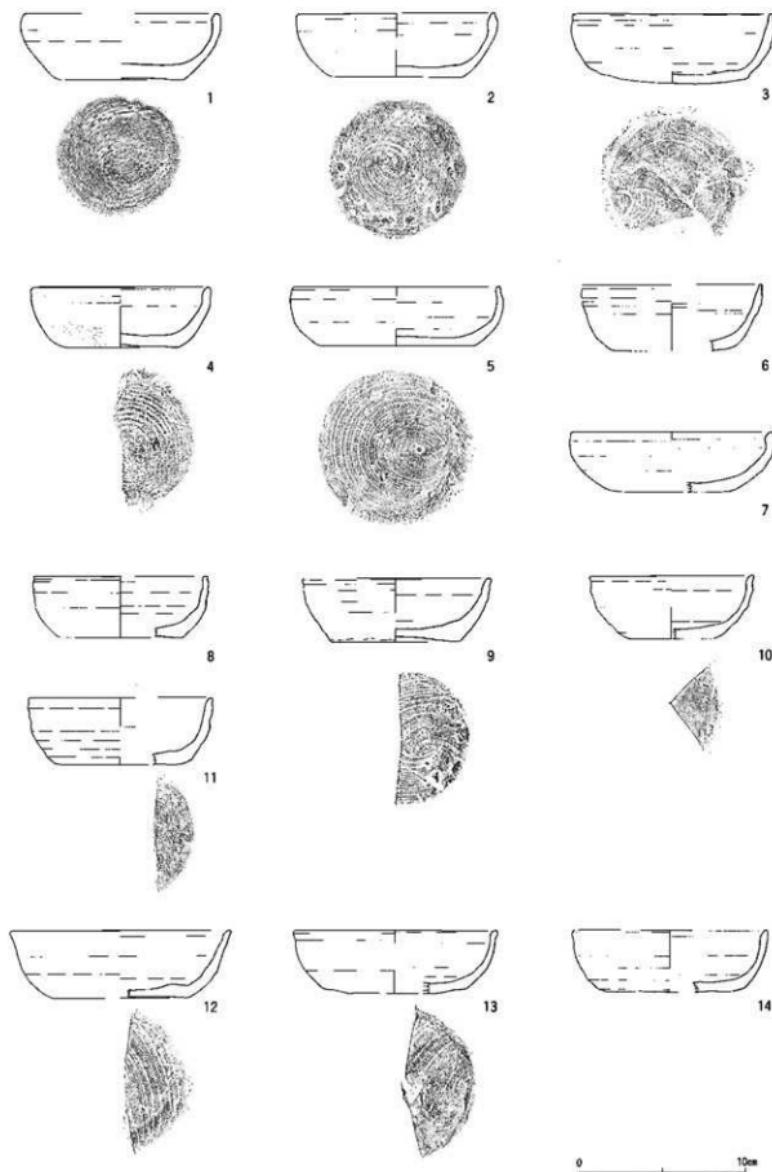
第16図 堤平遺跡出土須恵器実測図（2） S=1/3



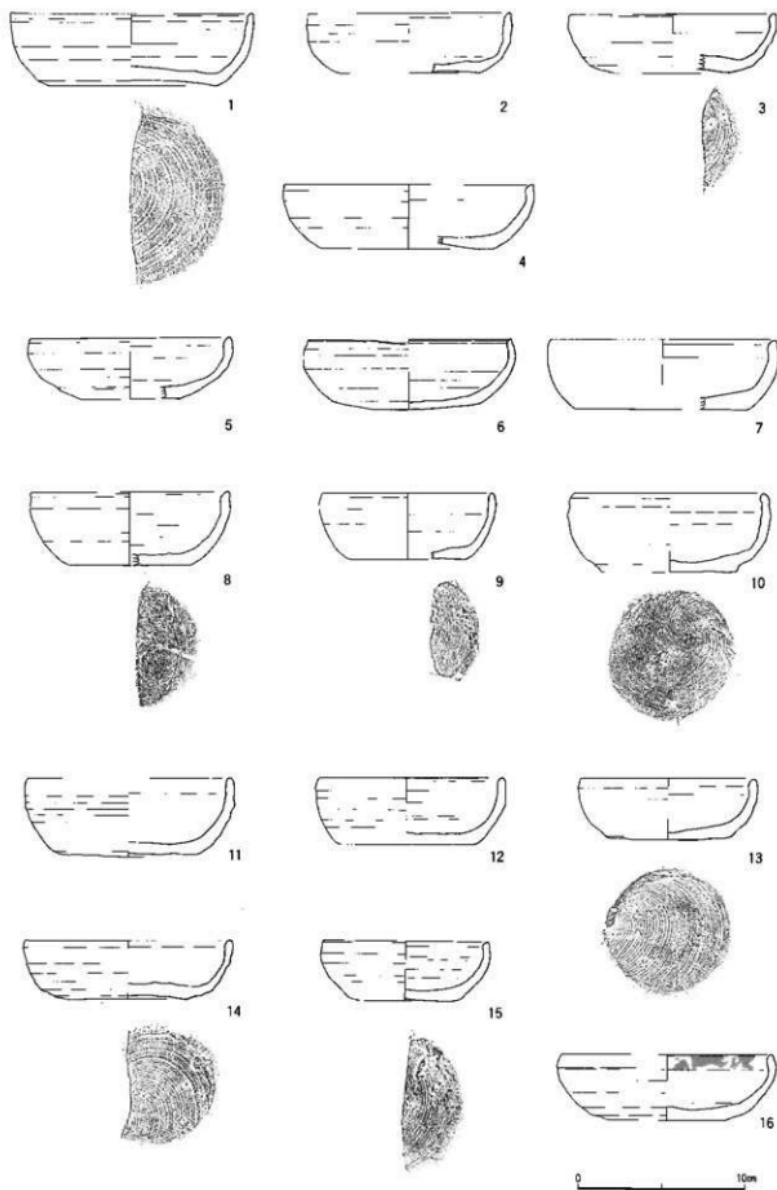
第17図 堤平遺跡出土須恵器実測図(3) S=1/3



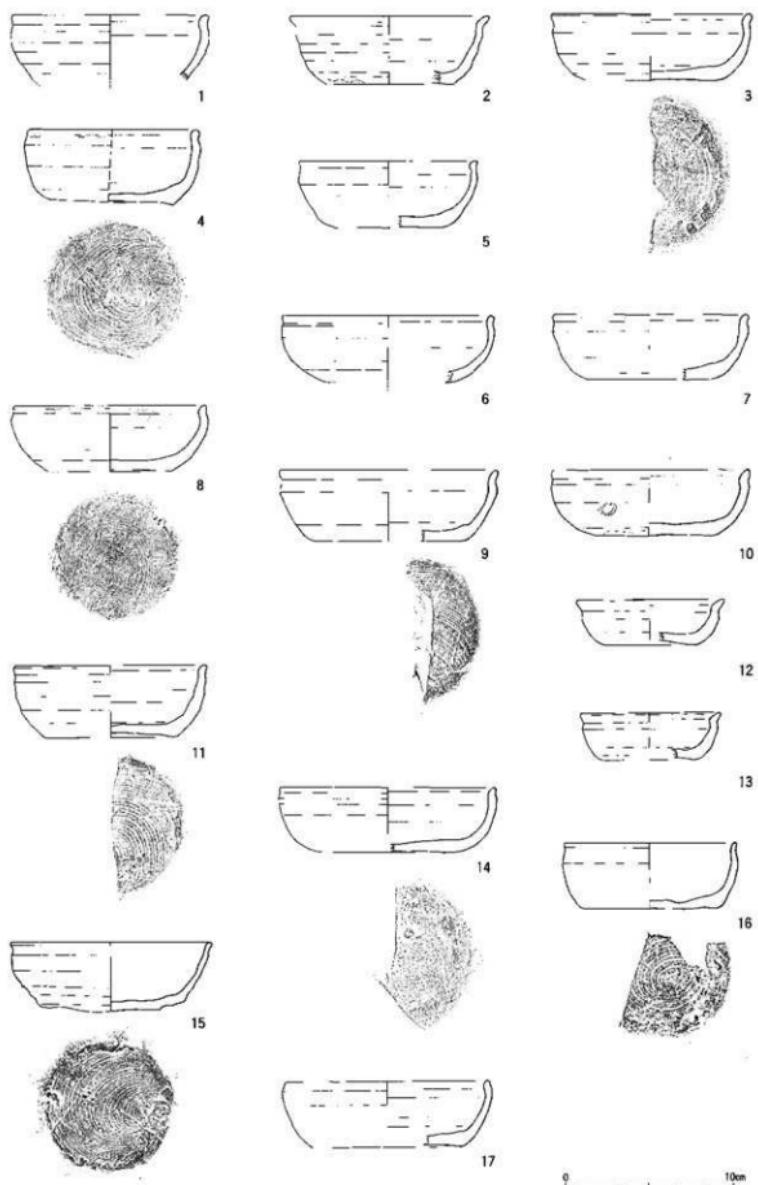
第18図 提平遺跡出土須惠器実測図(4) S=1/3



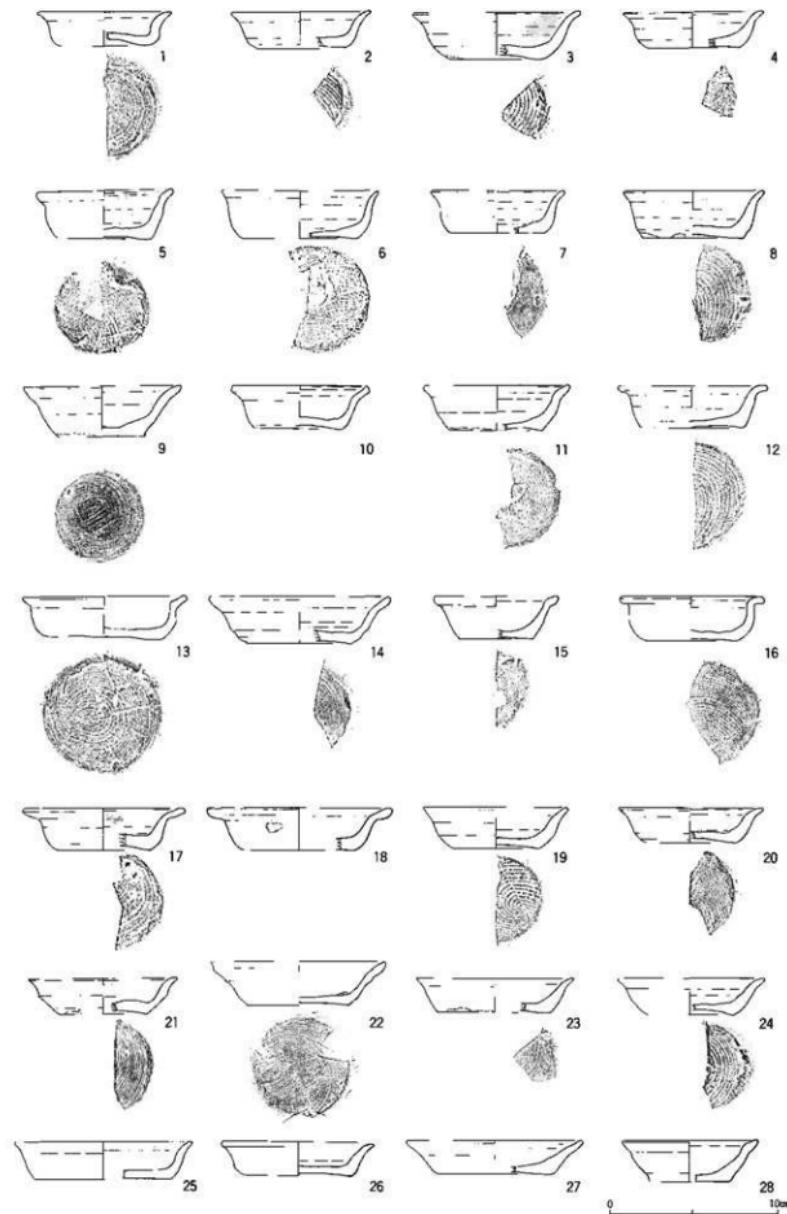
第19図 堤平遺跡出土須恵器実測図(5) S=1/3



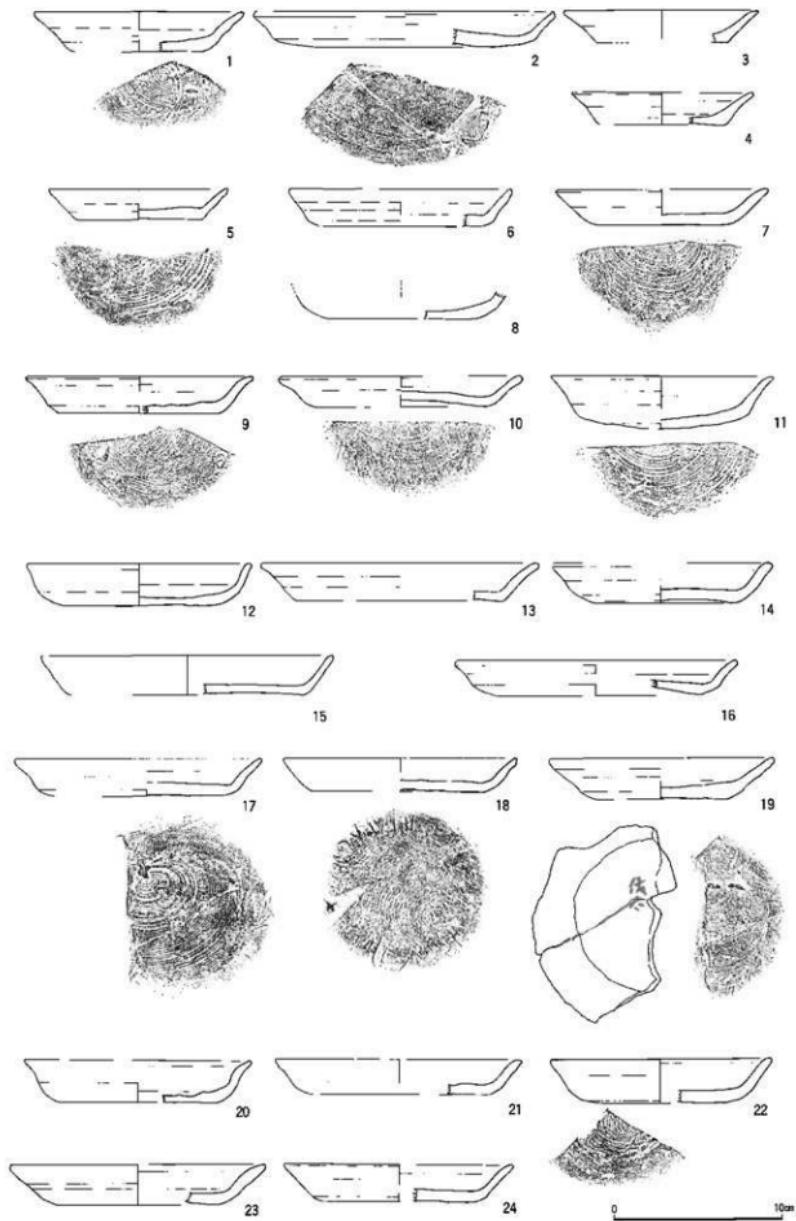
第20図 堤平遺跡出土須恵器実測図(6) S=1/3



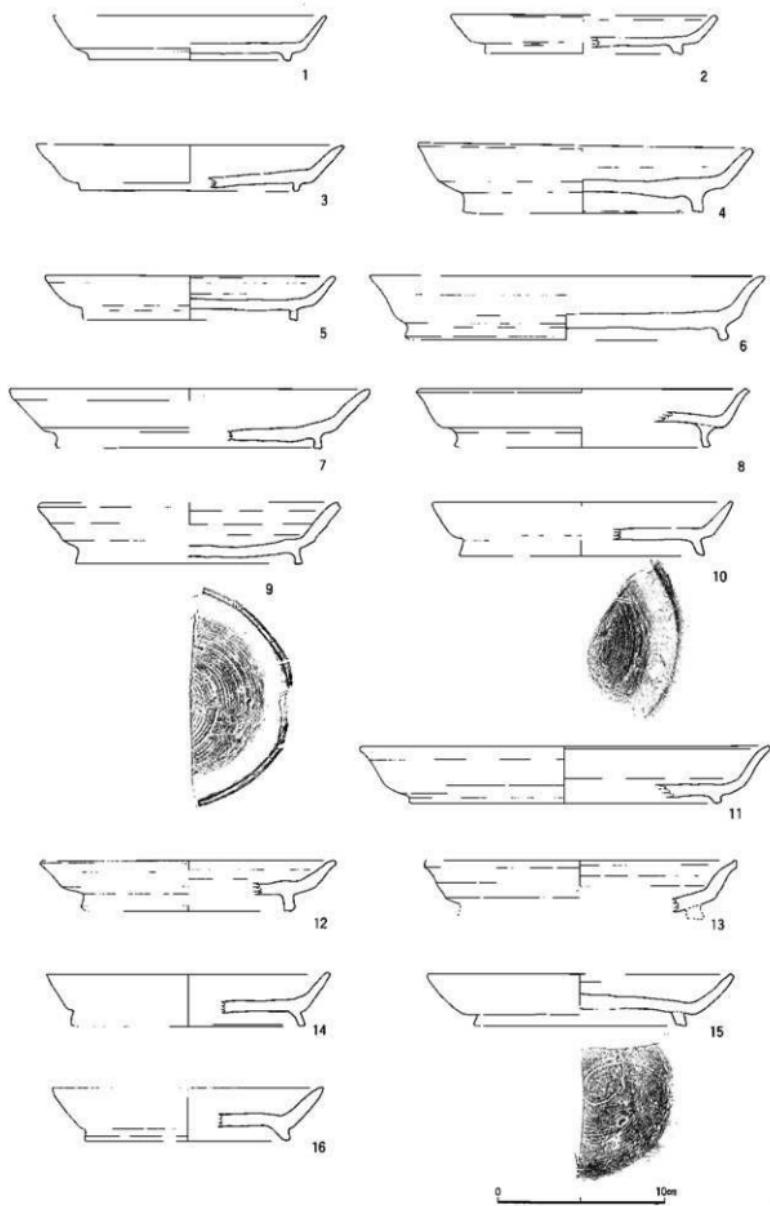
第21図 堤平遺跡出土須恵器実測図(7) S=1/3



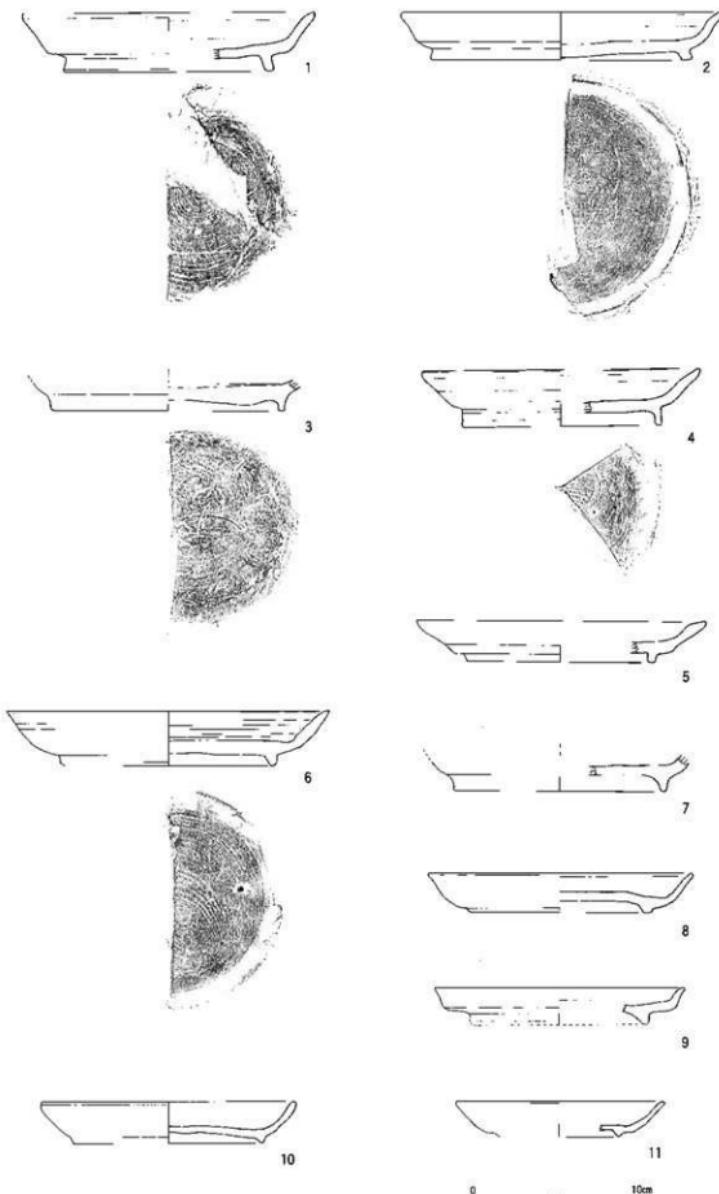
第22図 堤平遺跡出土須恵器実測図(8) S=1/3



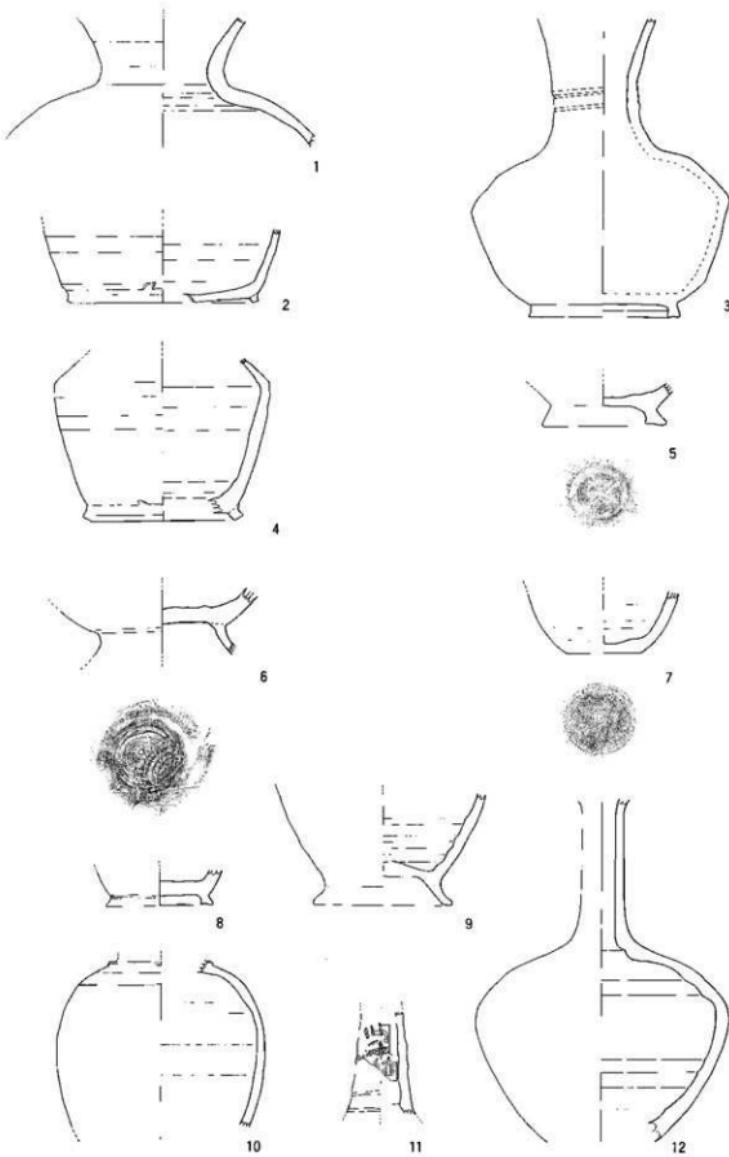
第23図 堤平遺跡出土須恵器実測図(9) S=1/3



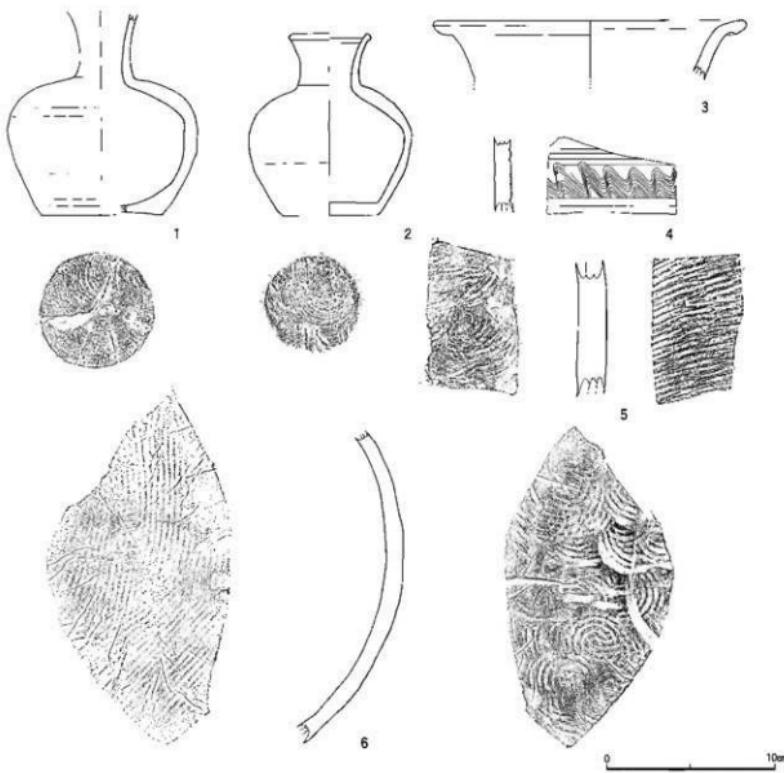
第24図 堤平遺跡出土須恵器実測図 (10) S=1/3



第25図 堤平遺跡出土須恵器実測図 (11) S=1/3



第26図 堤平遺跡出土須恵器実測図(12) S=1/3



第27図 堤平遺跡出土須恵器実測図(13) S=1/3

高台皿 第24・25図

口径 12.6 cm~25.8 cm、器高は 2.1 cm~4.2 cm を測るものである。高台の付き方には 3 タイプが存在し、直立するもの（第24図-1~5など）、外方に張り出すもの（第24図-10~14など）、小さな断面三角形のもの（第25図-10~11など）がつくものが見受けられる。19は底部外面にX状のヘラ記号が記されている。

壺 第26図

1は外方に大きく開く頸部をもつものである。2は直線的に立ち上がる頸部をもった蓋片である。3は肩の張った頸部に緩やかに開く頸部の付くもので、頸部に二本の沈線を廻らす。4は高台が外方に向けて付く蓋片である。5は外方に開いた高台をもつもので底部外面にX状のヘラ記号が記されている。6は体部及び高台がともに大きく外に開くもので底部外面に 6 mm の円形のくぼみを有する。7は高台を持たない破片で、底径は 4.8 cm を測る。11~12は細長い頸部をもつもので水瓶を

模したものと考えられる。10は頸部に突帯を持つもので同様の器形の完形品が渋山池遺跡で出土している⁽¹⁾。11は頸部の破片で3本の沈線がめぐり、ヘラ書き文字が記されており「□千縦？」と読め人名を示しているとも思われる。12は肩の張ったもので頸部の長さは残存部で8.4cmを測る。

短頸壺その他 第27図

27図-1・2は短頸壺で、2は底径6.3cm、器高は11.4cmを測る。3は壺の口径部片である、口縁が玉縁状を呈しており、口径は19.5cmであった。4・5・6は壺の胴部である、4は沈線の間に波状文を有し、5・6は外向にタタキ目、内面に青海波文を有する

土師器

高坏など 第28図

1~12は高坏である。1・3は体部外面の立ち上がり部分に稜をもつものである。6は体部が内消しつつ立ち上がるるものである。4はなだらかに立ち上がるものである。13・14は鼓形器台である。15~18は低脚坏である。19は台状の高台を持つ坏である。20は壺の口部片である。

皿 第29図

内面・もしくは内外面に煤が付着するものがある(6・9・12・20・21・23・24・26・27)。これらは灯明具として利用されていた可能性がある。また、2・8・17以外は赤色顔料痕を残すものである。1~14は高台を持たないものである。1・7は底部が中央付近で高くなっている。13・14は23.1cm・18.9cmと比較的口径の大きなものである。15~27は高台を持つものである。これらは比較的しっかりとした高台がつくもの(15~19)と断面三角形の小さな高台がつくもの(16~27)に分けられる。

坏 第30図

高台を持つもの(33・35)と持たないものがある。いずれのものにも煤の付着が見られるものがあり、これらは灯明具として利用されたと考えられる。また、2・3・5・9・15などの赤色顔料痕を残すものが多く見受けられる。1は体部が内湾して立ち上がるものである。直線的にのびる体部を持つもののうち、煤が付着するものは、6~8・10~13のように比較的小型のものに多くなっている。33・34は回転糸切りにより底部を切り離している。

壺 第31図~38図-2

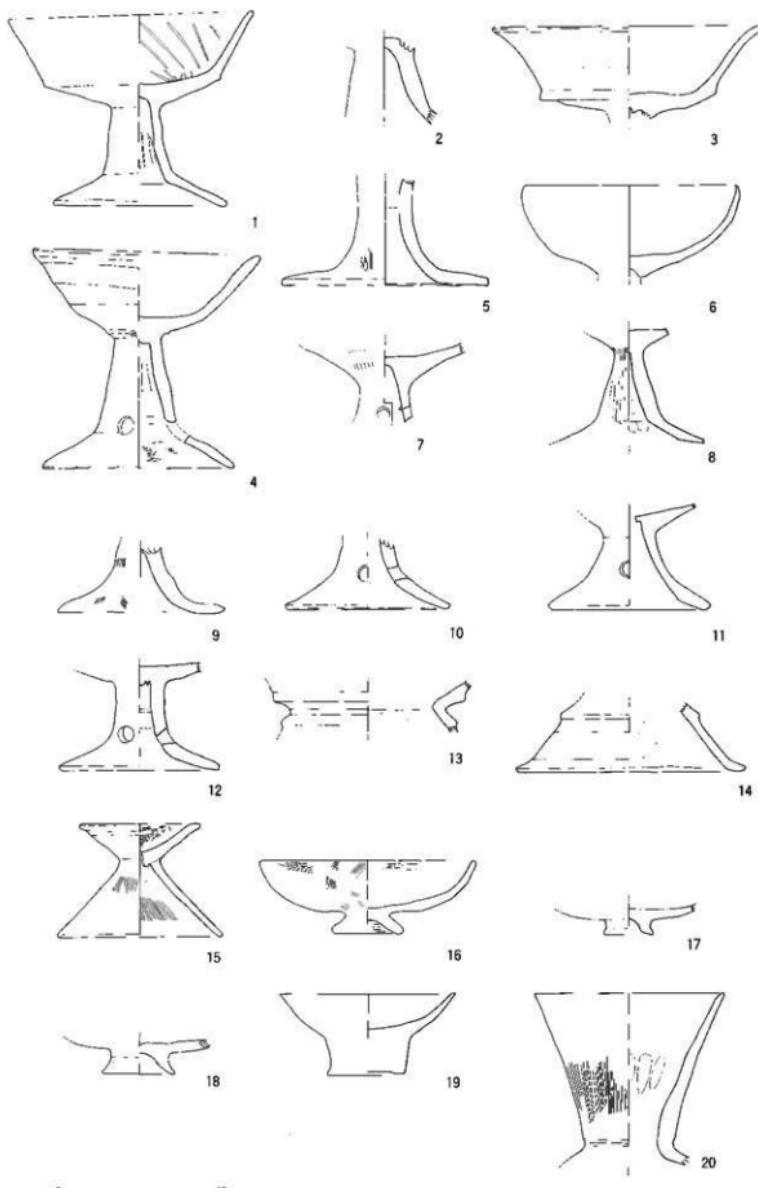
当遺跡でもっとも出土数が多い器種で計80点を実測掲載した。口縁部が「く」の字に屈曲するもの、外傾して伸びるもの、外反して伸びるものなどがある。詳細は観察表に記載した。

その他の器種 第38図-3~11

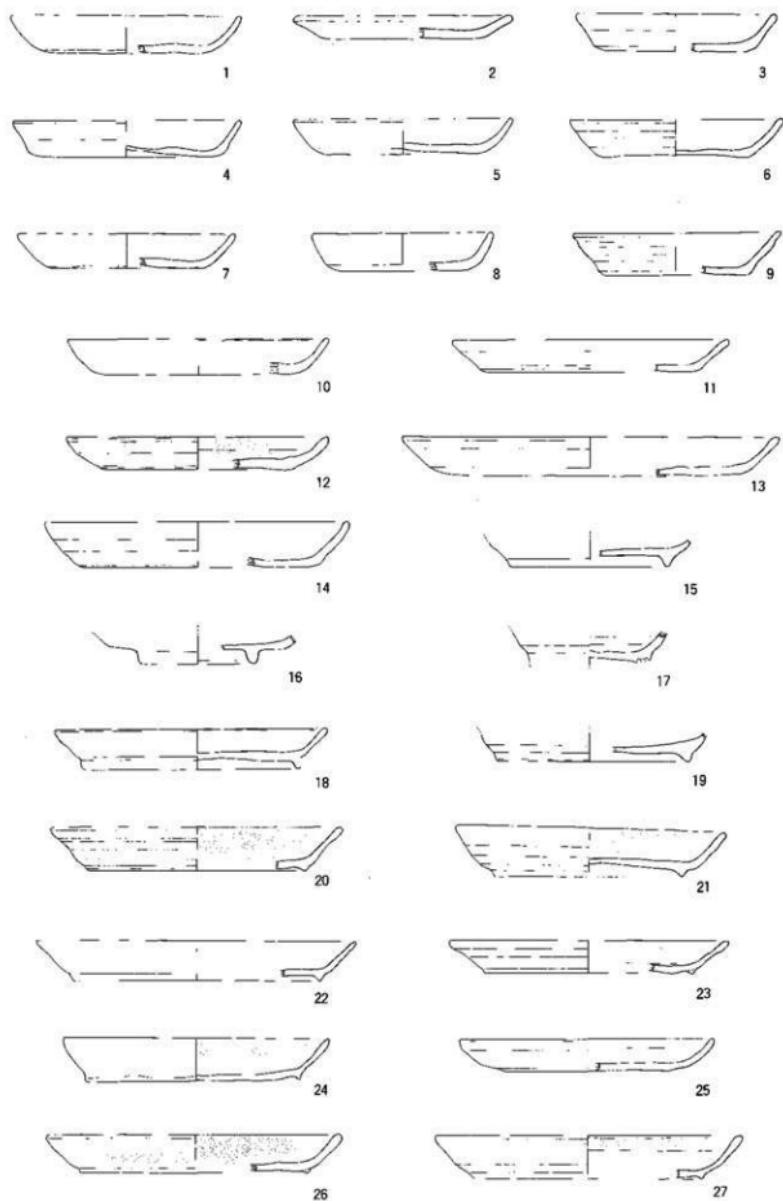
3は瓶の取手である。4・5は小型の遺物で製塙土器の可能性がある。6・7は丸底のミニチュア土器である。ともに口縁部は欠損している。8~12は高台を有する壺である、このうち7は底部に糸切り痕を有するものである。11は内面が黒色を呈している。12は内外面ともに黒色を呈す薄手のもので、内面には磨きが施されている。

土製品 第39図-1~6

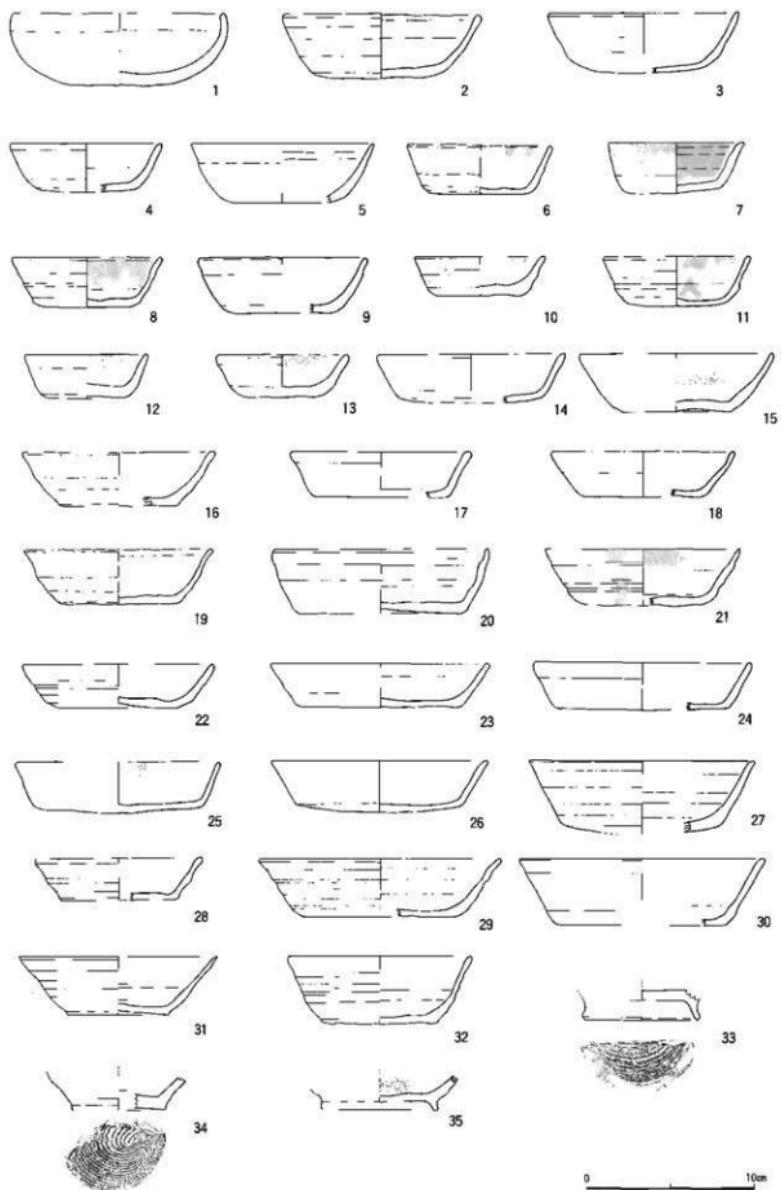
土鍤・土壺・土製支脚がある。1・2は管状の土鍤である。3は土壺と思われるものである。4は土製の紡錘車と思われる。5・6・7は土製支脚の底部片と思われ、それぞれ底面の窪むものである。8は用途不明の土製品の破片で、中央部がすばまり、表面に指頭圧痕の見られるものである。



第28図 堤平遺跡出土土師器実測図(1) S=1/3



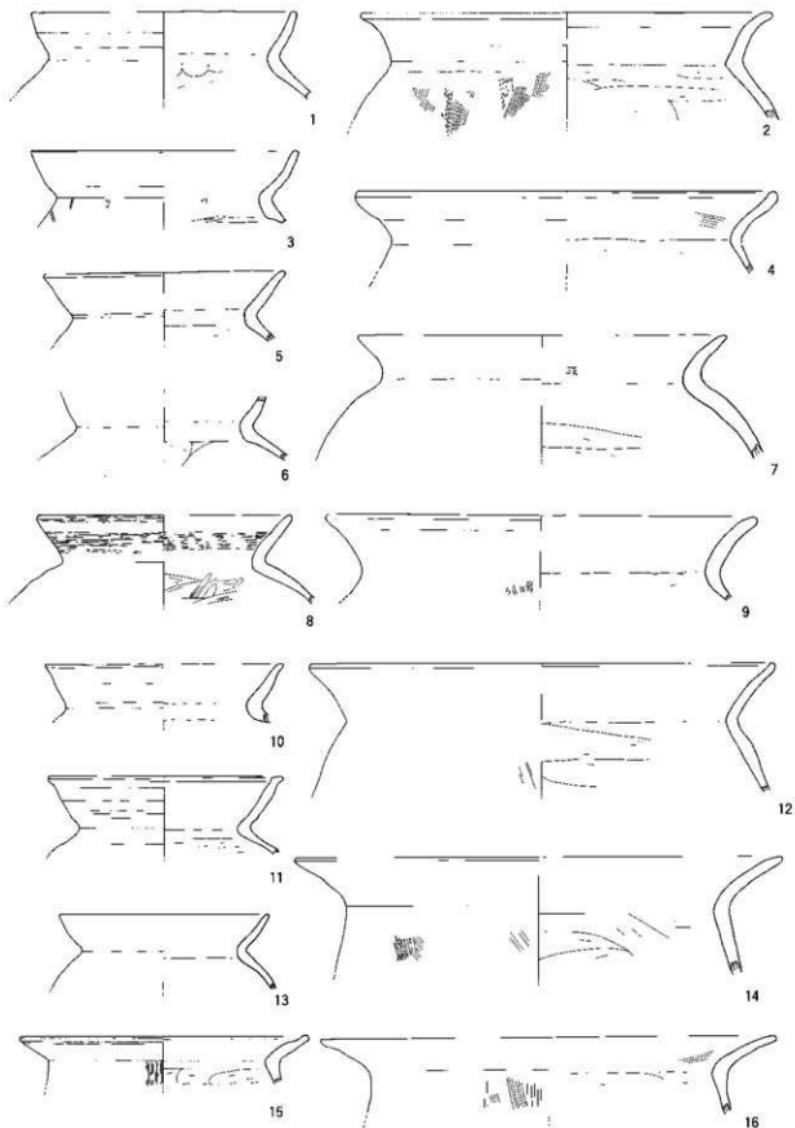
第29図 堤平遺跡出土土師器実測図(2) S=1/3



第30図 堤平遺跡出土土師器実測図(3) S=1/3

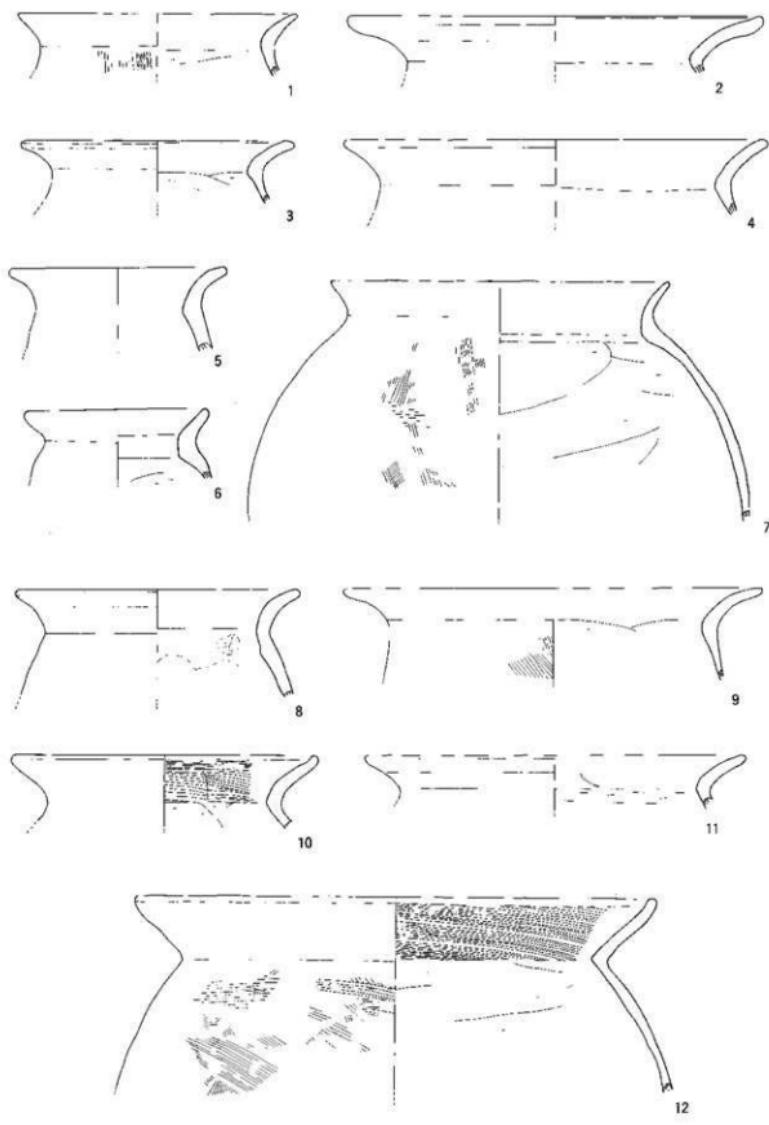
堤 平 遺 跡 出 土 土 師 器 (甕) 觀 察 表

件目 番号	法量(cm) 口径 箍高	調 整 の 特 徴		色 調	備 考
		外 面	内 面		
31-1 16.2	口縁:ヨコナデ、体部:ナデ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:横彎庄底・ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 黄色	
31-2 25.0	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡黃褐色 黄色	
31-3 16.0	口縁:ヨコナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡黃褐色 黄色	
31-4 25.4	口縁:ヨコナデ、体部:ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡黃褐色 黄色	
31-5 14.6	口縁:ヨコナデ、体部:ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡黃褐色 黄色	
31-6	口縁:ヨコナデ、体部:ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ナデ・ケズリ ナデ	淡黃褐色 黄色	
31-7 22.4	口縁:ヨコナデ、体部:ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリの後ナデ・ケズリ ナデ	淡黃褐色 黄色	
31-8 15.4	口縁:回転ナデ	口縁:回転ナデ、体部:ヘラケズリ後庄底 ナデ	口縁:回転ナデ、体部:ケズリ ナデ	褐色 黄色	
31-9 26.4	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 黄色	
31-10 14.6	口縁:ヨコナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 黄色	
31-11 28.5	口縁:ナデ 体部:タテ方向のハケ ナデ	口縁:回転ナデ・一極減滅、体部:ヘラケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡黃褐色	
31-12 14.2	口縁:ナデ・ヨコナデ、体部:ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ヨコナデ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ヨコナデ ナデ	淡黃褐色 淡褐色	
31-13 12.8	不明	体部:ケズリ	体部:ケズリ	淡褐色	
31-14 29.6	口縁:回転ナデ・一極減滅、体部:不定方向のハケ ナデ	口縁:回転ナデ・一極減滅、体部:ヘラケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡黃褐色	
31-15 17.6	口縁:ナデ・芯棒・柔、体部:タテ方向のハケ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡黃褐色	
31-16 27.7	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 明褐色	
32-1 17.4	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 明褐色	
32-2 26.6	ヨコナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	赤褐色 淡褐色	
32-3 16.8	ヨコナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
32-4 26.3	口縁:ヨコナデ、体部:ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
32-5 13.8	不明	不明	不明	淡褐色	
32-6 11.1	口縁:ヨコナデ、体部:ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	明褐色 淡褐色	
32-7 21.2	口縁:不明、体部:ハケメ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	明褐色 淡褐色	
32-8 17.4	口縁:回転ナデ、体部:ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
32-9 26.2	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
32-10 18.6	ナデ	口縁:ハケメ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ナデ、体部:ケズリ ナデ	赤褐色 淡黃褐色	
32-11 23.4	口縁:回転ナデ、体部:不定方向のナデ ナデ	口縁:ナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ハケメ、体部:ケズリ ナデ	淡黃褐色 淡黃褐色~淡褐色	
32-12 33.0	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
33-1 13.3	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
33-2 28.5	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
33-3 27.0	口縁:不走方向のナデ、体部:タテ方向のハケ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
33-4 30.0	口縁:ナデ・一部崩れ、体部:不明	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
33-5 30.4	ナデ	ナデ	ナデ	淡褐色	
33-6 33.0	口縁:ヨコナデ、体部:タテ方向のハケ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
33-7 28.0	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	口縁:ハケメの後ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:回転ナデ、体部:ヘラケズリ ナデ	明灰褐色 淡黃褐色	
34-1 23.4	口縁:回転ナデ、体部:ナデ・ヘラ痕 ナデ	口縁:ナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡黃褐色 淡黃褐色	
34-2 20.5	口縁:ナデ、体部:ハケメ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
34-3 20.4	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ヘラケズリ ナデ	赤褐色 淡黃褐色	
34-4 18.6	回転ナデ	口縁:回転ナデ、体部:ヘラケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	暗黃褐色 淡黃褐色	
34-5 24.0	回転ナデ	回転ナデ	ヨコナデ	淡褐色	
34-6 17.8	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡茶褐色~茶褐色 淡褐色	
34-7	口縁:ナデ、体部:タテ方向のハケ ナデ	口縁:ナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
34-8 20.4	ナデ	口縁:ナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 明灰褐色	
34-9 20.6	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	明灰褐色 淡褐色	
34-10 20.9	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	明灰褐色 淡褐色	
34-11 21.6	ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
34-12 20.4	ヨコナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
34-13 23.5	不明	不明、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
34-14 32.4	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	口縁:ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡黃褐色 淡黃褐色	
35-1 20.6	口縁:ナデ、体部:タテ方向のハケ	ヨコハク、体部:ケズリ ナデ	ヨコハク、体部:ケズリ ナデ	淡黃褐色 淡黃褐色	
35-2 19.6	ナデ	ナデ・一部崩れ、体部:ナデ・ケズリ ナデ	ナデ、体部:ケズリ ナデ	赤褐色 外: 暗褐色、内: 黄褐色	
35-3 24.4	口縁:ヨコナデ、体部:ヨコ及びナメ方向のハケ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	外: 暗褐色、内: 黄褐色 外: 黑色の漆付箋	
35-4 19.6	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	黄褐色 淡褐色	
35-5 23.6	口縁:ナデ、体部:不明	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
35-6 18.6	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	明灰褐色 淡褐色	
35-7 20.6	口縁:ヨコナデ、体部:ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
35-8 19.0	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
35-9 21.4	口縁:ヨコナデ、体部:ハケメ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
35-10 14.4	口縁:回転ナデ、体部:ナデ・ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	暗褐色 淡褐色	
35-11 18.4	口縁:ヨコナデ、体部:ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
35-12 20.8	口縁:回転ナデ、体部:ナデ	ヨコハク、体部:ケズリ ナデ	ヨコハク、体部:ケズリ ナデ	淡黃褐色 淡褐色	
35-13 15.4	口縁:ナデ、体部:ハケメ	ヨコハク、体部:ケズリ ナデ	ヨコハク、体部:ケズリ ナデ	褐色 淡褐色	
35-14 16.8	口縁:ナデ、体部:不明	ナデ	ナデ	褐色	
36-1 22.6	ヨコナデ	ヨコナデ、体部:ナデ	ヨコナデ、体部:ナデ	淡褐色 淡褐色	
36-2 22.5	ヨコナデ、体部:ハケメ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	明灰色 淡褐色	
36-3 23.8	ヨコナデ、体部:ハケメ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
36-4 27.0	ヨコナデ、体部:ナデ・タテ方向のハケ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
36-5 29.4	口縁:ナデ、体部:ナデ・タテ方向のハケ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 外: 暗褐色、内: 黄褐色	
36-6 30.0	ヨコナデ、体部:ハケメ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
36-7 28.6	口縁:回転ナデ、体部:タテ方向のハケ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
36-8 29.4	ヨコナデ、体部:ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
37-1 23.8	ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
37-2 20.7	口縁:ヨコナデ、体部:不明	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
37-3 22.0	ヨコナデ、体部:不明	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
37-4 23.6	ナデ	回転ナデ、ナデ後一部ケズリ ナデ	回転ナデ、ナデ後一部ケズリ ナデ	褐色 明灰色	
37-5 26.2	口縁:ナデ、体部:ハケメ	ナデ、体部:ケズリ ナデ	ナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 明灰色	
37-6 32.8	ヨコナデ、体部:ケズリ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
37-7 24.6	ナデ	ナデ、体部:ケズリ ナデ	ナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
37-8 28.9	ヨコナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 淡褐色	
38-1 28.4	ヨコナデ、体部:ハケメ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	ヨコナデ、体部:ケズリ ナデ	淡褐色 黄褐色	

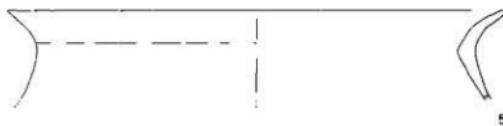
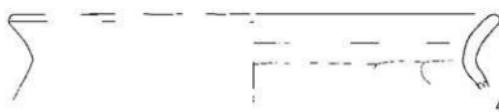
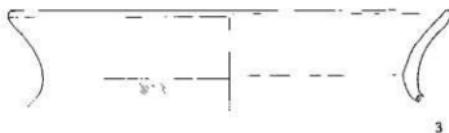


第31図 堤平遺跡出土土師器実測図(4) S=1/3

0 10cm

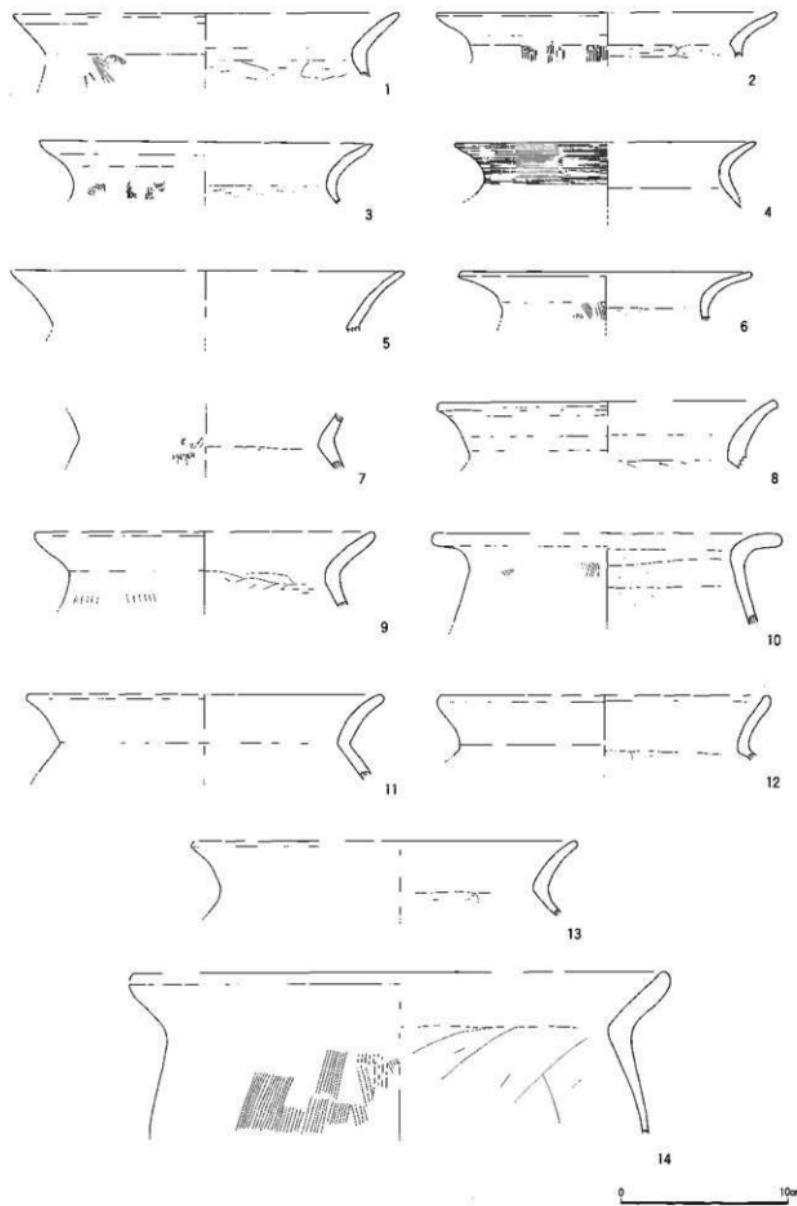


第32図 堤平遺跡出土土師器実測図(5) S=1/3

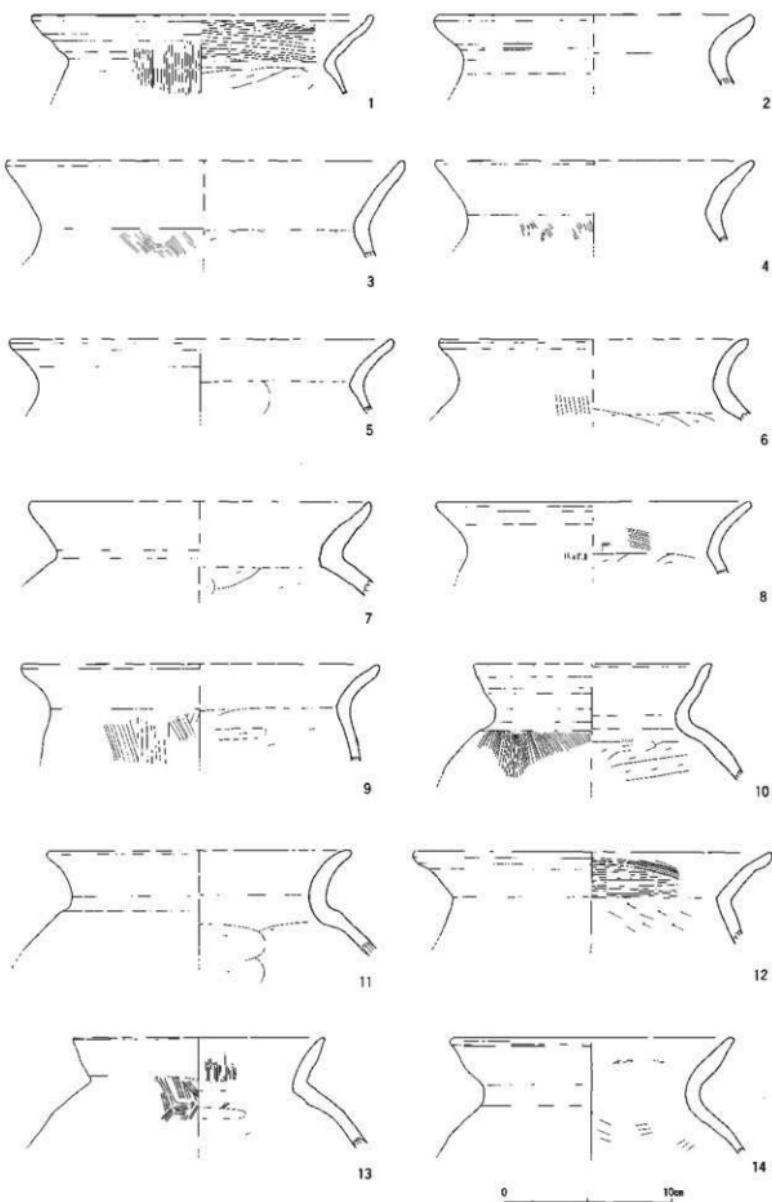


0 10cm

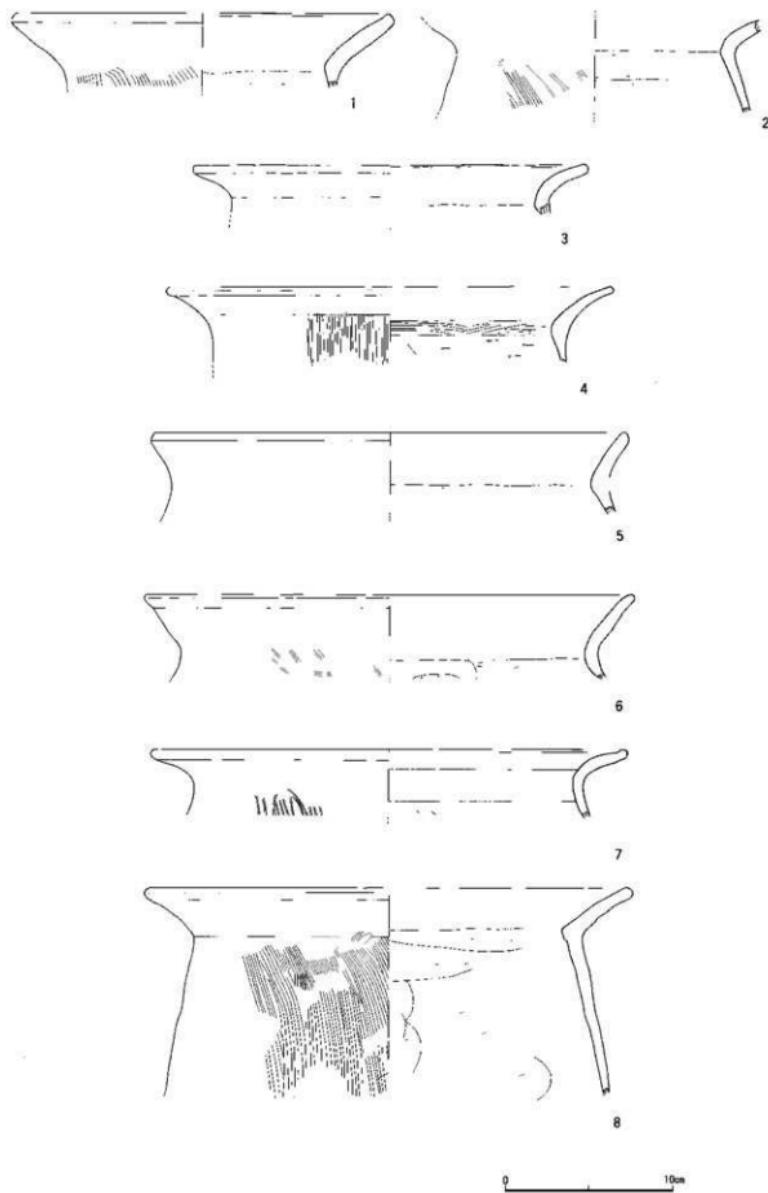
第33図 堤平遺跡出土土師器実測図（6） S=1/3



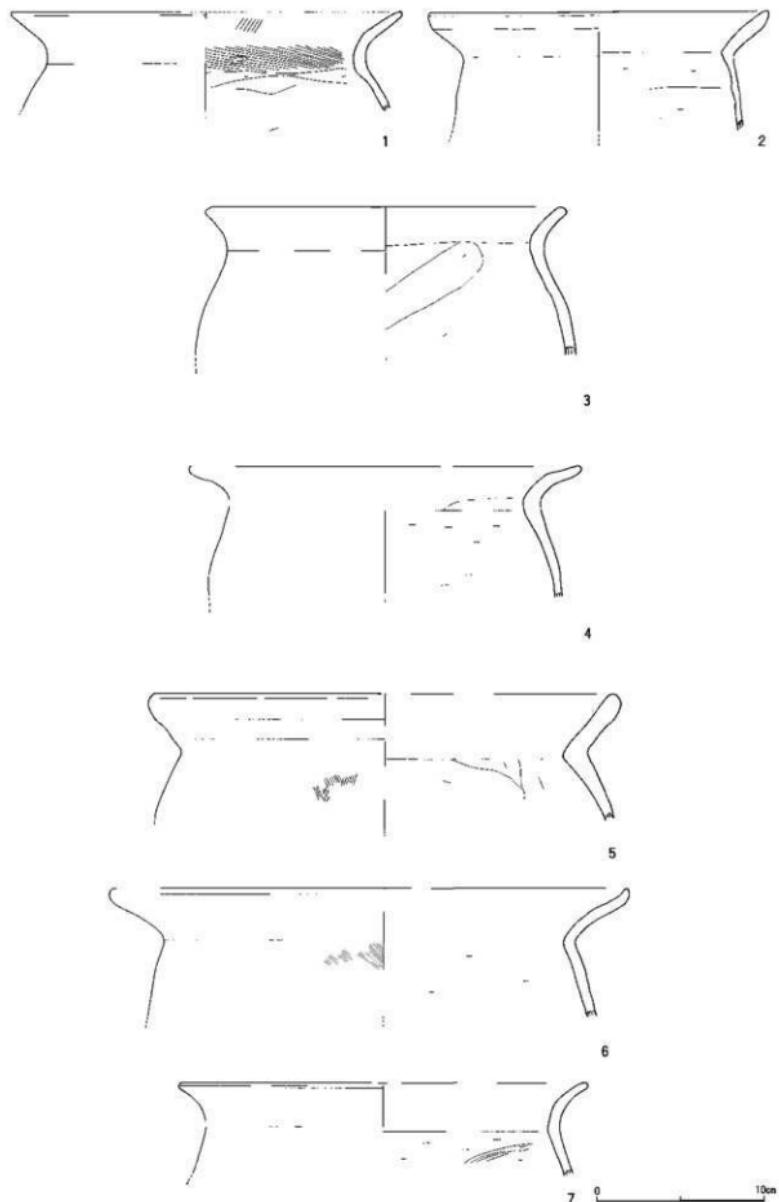
第34図 堤平遺跡出土土器実測図(7) S=1/3



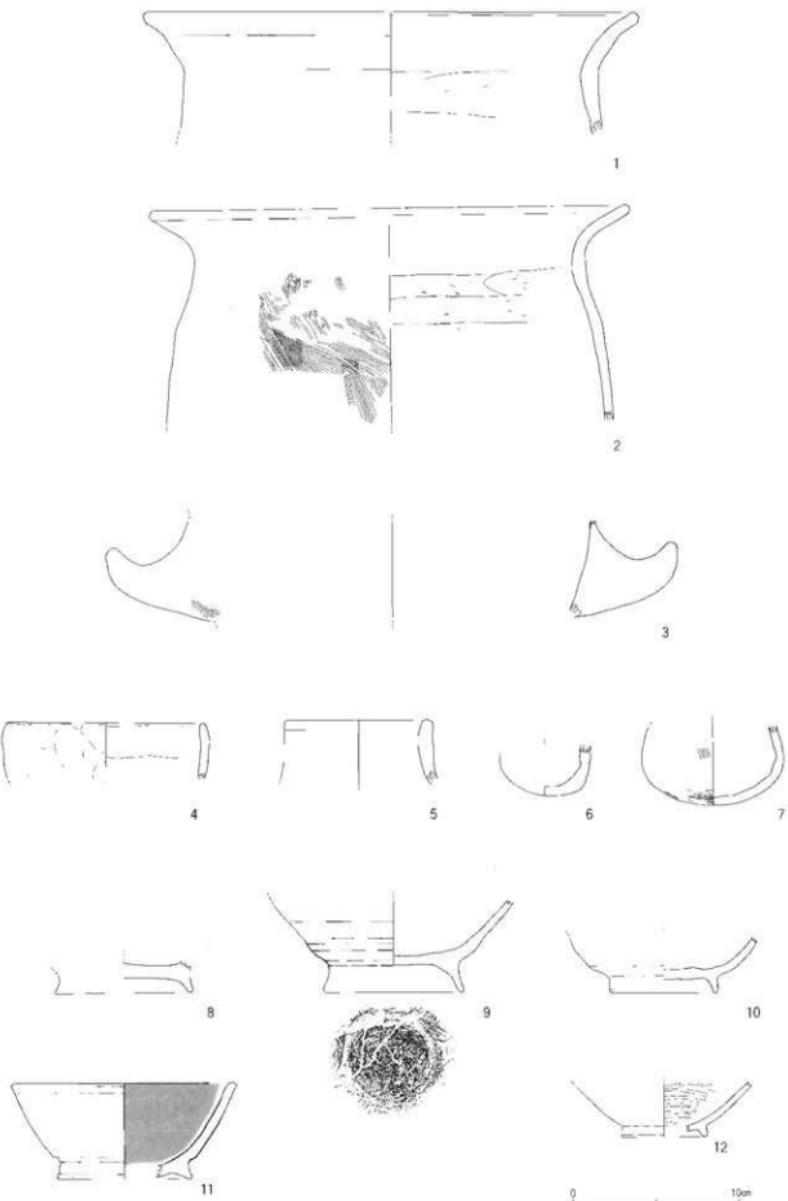
第35図 堤平遺跡出土土師器実測図(8) S=1/3



第36図 堤平遺跡出土土師器実測図(9) S=1/3



第37図 堤平遺跡出土土師器実測図(10) S=1/3



第38図 堤平遺跡出土土師器実測図 (11) S=1/3

青銅製品 第39図-9・10・11

10・11は同一個体と思われるもので、青銅製の容器の一部だと考えられる。厚さは約2mmで内面口縁部下に沈線がめぐるものである。9は青銅製品の一部と考えられるが、青銅塊の可能性もある。青銅塊であった場合、鋳造時の「湯こぼれ」の可能性が考えられる。

鉄製品 第40図

1~25は断面が方形を呈する棒状の鉄製品でおそらく釘などの建築材と考えられる遺物である。9はほぼ直角に折れ曲がるものでサビぶくれの部分に須恵器片が固着している。26は両端のとがる小型で直角に折れ曲がるものである。27は袋状鉄斧で、袋部から刃部に至る肩部に張り出しを持たないものである。28~30は板状の鉄製品である。28は中央部付近で曲がっている。31・32は刀子と思われるものである。33は「へ」の字状の鉄製品であるが用途等は不明である。

製鉄関連遺物 第41図

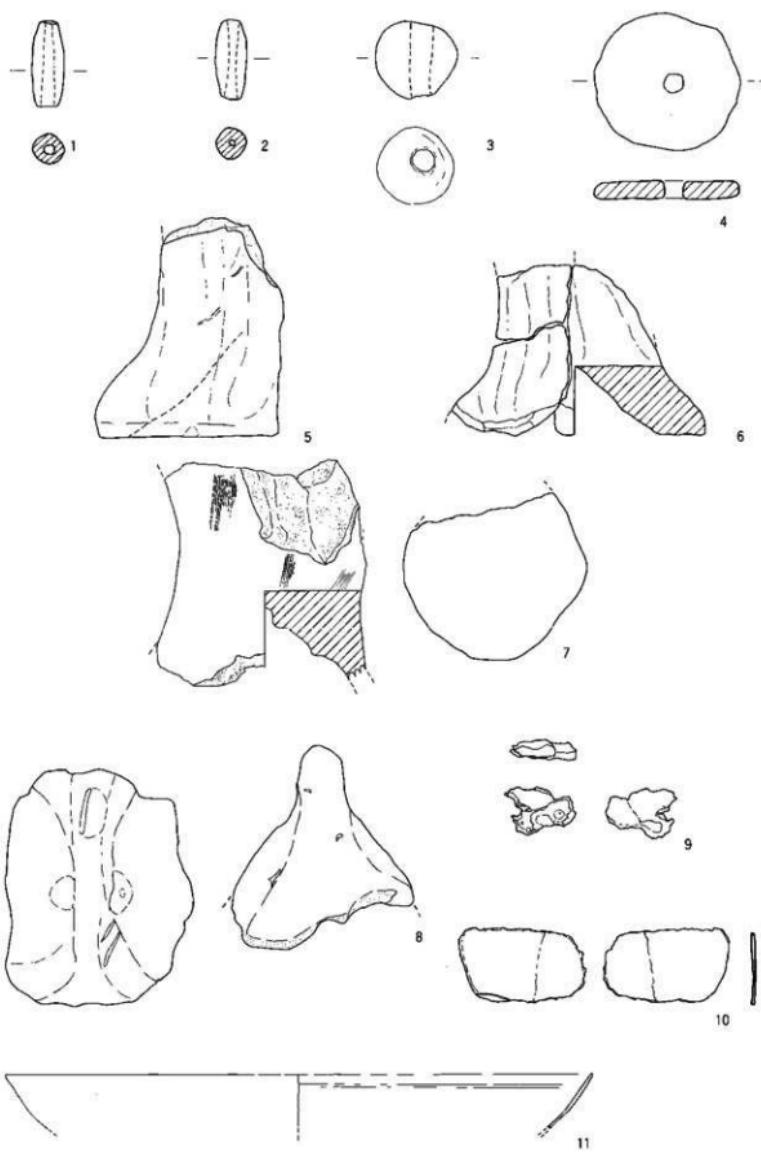
炉壁片、楕形鍛冶滓、金属性、羽口が出上している。1は炉壁片である。表面は被熱して紫紅色に変色している。2は羽口片である。3はガラス質滓である。表面に綠青状の付着物があり、銅滓の可能性がある。4・5は楕形鍛冶滓である。いずれも表面は錆化しており、表面には木炭が固着している。6は羽口である。先端部の外側には溶が溶着している。先端部の孔径は2.7cmを測る。

石器及び石製木製品 第42図

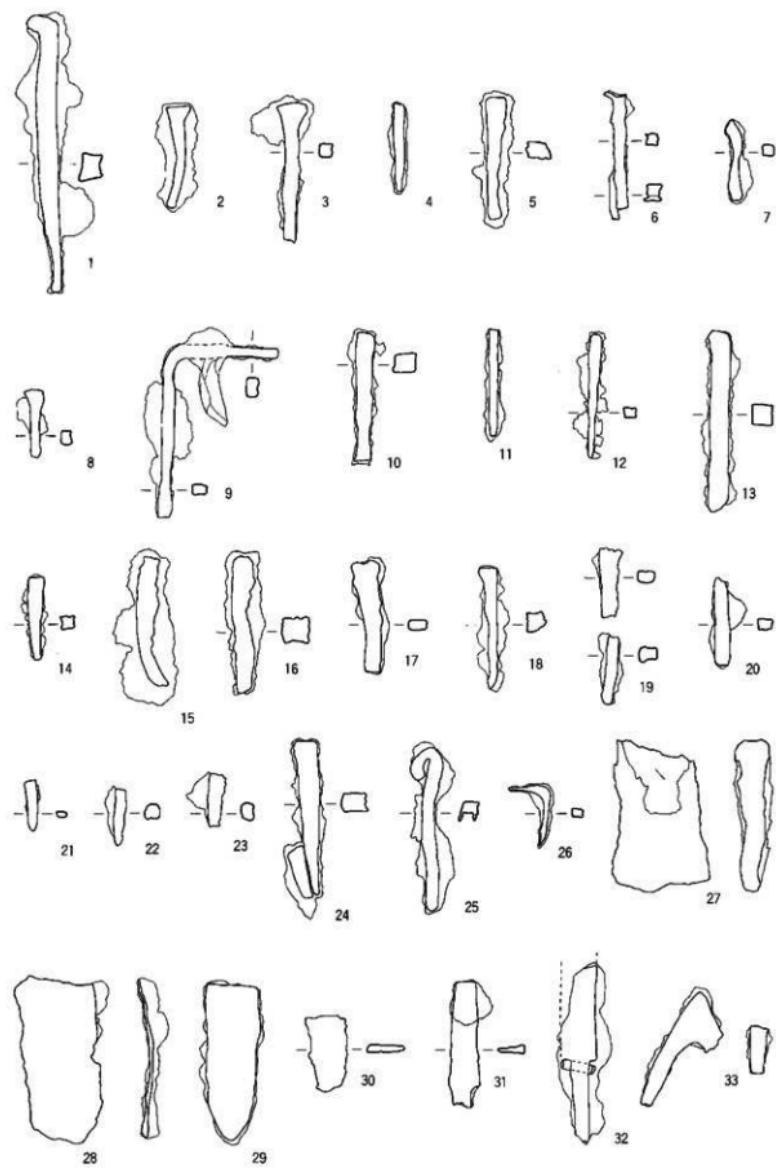
1はナイフ形石器である。石材は玉髓と思われる。右刃状の縱長の剥片の2側面を打ち欠いて三角形に加工している。長さ2.95cm、幅0.95cmを測る。「茂戸型」「九州型」と呼称されてきた型式に属するものと思われる^⑨。2・3は安山岩製の石鎌である。4・5・6はともに用途不明の遺物で、未製品と思われる。

玉類 第42図 7・8

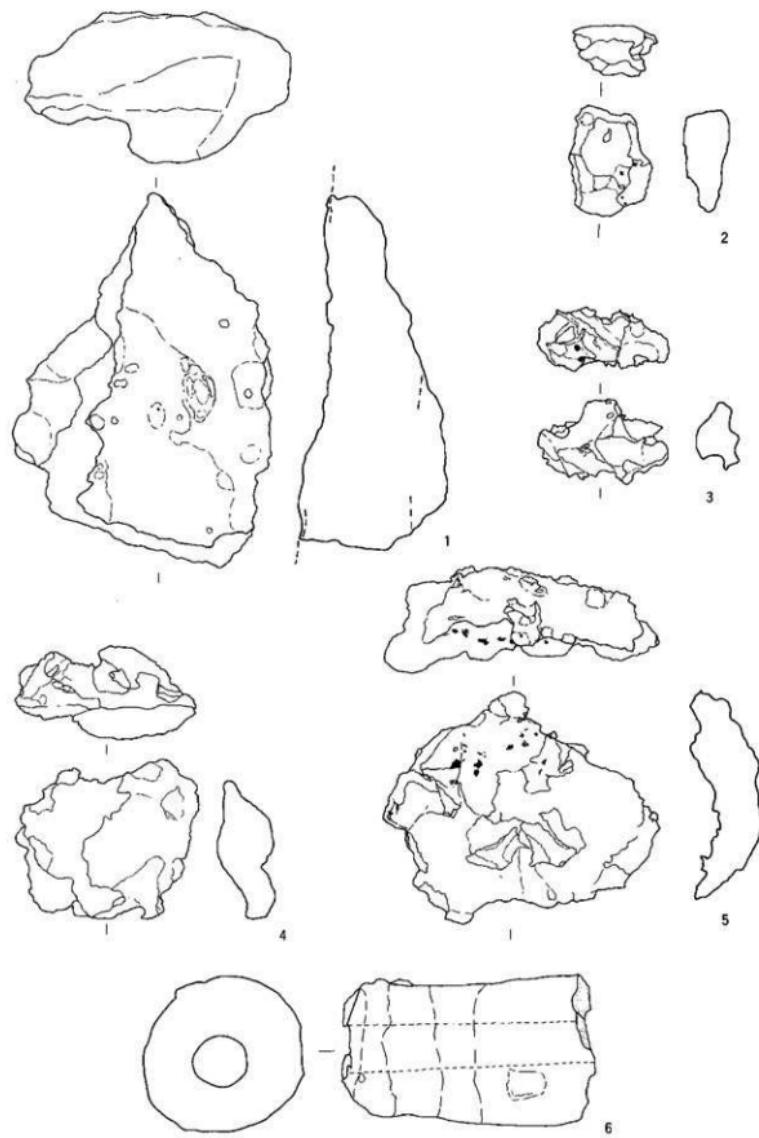
8は緑色泥岩製と思われる管玉である。全長1.5cm、径は5mm、孔径2mmを測り淡緑灰色を呈している。両面穿孔を施すものである。7はガラス製と思われる小玉で、緋色を呈している。径は12mm、孔径は4mm、厚は8mmを測る。表面にわずかに気泡がみられる。



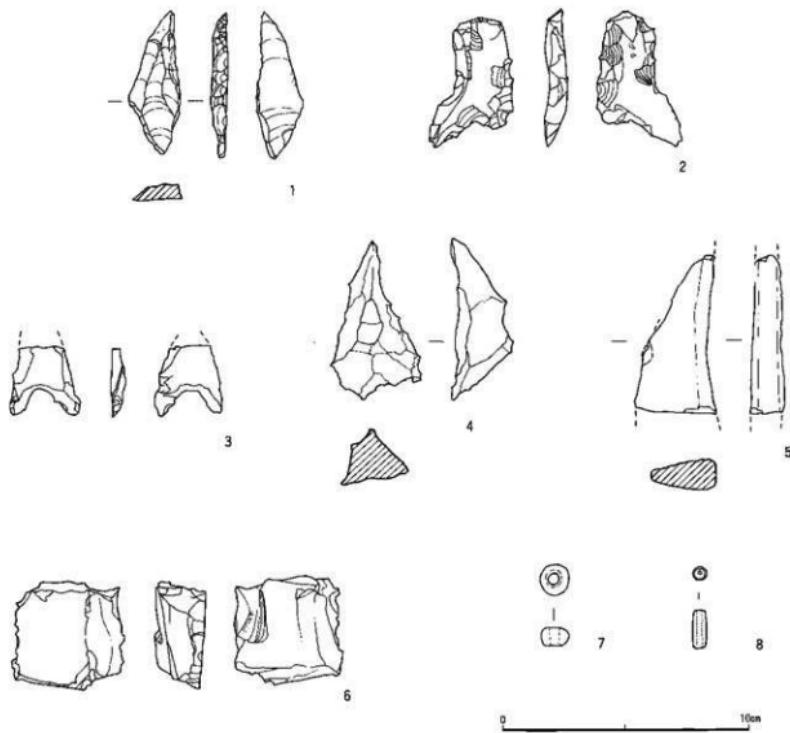
第39図 堤平遺跡出土遺物実測図 (1) S=1/2



第40図 堤平遺跡出土遺物実測図(2) S=1/2



第41図 堤平遺跡出土遺物実測図（3） S=1/2



第42図 堤平遺跡出土遺物実測図(4) S=1/2

ま　と　め

堤平遺跡では、旧石器時代から11世紀に至る遺物と、古墳時代初頭の堅穴住居跡2棟及び8世紀中頃から11世紀の時期に存在したと考えられる建物群などを確認した。

旧石器時代の遺物として、玉髓製と思われるナイフ形石器が1点出土している。島根県で出土例の少ない旧石器の新例として大きな意義を持つと思われる。また、この遺物に使用されている技法はかつて「茂呂式」・「九州式」とされてきたもので、東日本もしくは九州との交流を物語る資料として注目されている^⑤。

弥生時代末から古墳時代にかけての住居跡は、平坦面上で1棟、北側斜面裾部で1棟の計2棟検出された。平坦面には同時期の住居跡が他にも存在し、その後の建物の建設に伴い削平された可能性が考えられよう。

平坦面上では8世紀を中心とする時期の建物跡が2棟確認されている。1棟は布掘りというあまり見られない方法で建てられている。これらの建物群と同じ遺構面上では、堀込みを有する岩盤が検出されており、この上に小型の建造物が存在した可能性がある。また、この平坦面の北側の斜面には、平坦面に上がるための道が検出されている。仮にこれらの遺構が同時期に存在したとすればどのような性格が想定できるであろうか。

当遺跡からは鉄鉢形土器及び須恵器の小型坏がまとめて出土しているが、このうち前者は僧侶の使用した仏具の上製代用品とされている。また後者は、「灯明皿型土器」と呼称され仏教関連の祭祀用具であったとの指摘がある^⑥。さらにヘラ書き土器、壘壠土器などの文字資料・青銅製の容器片などの一般集落跡では見られない遺物が出土している。これらのことと総合すると、平坦面上の一連の遺構は仏教に関連のある施設であった可能性が高いと思われる。

島根県内では近年堤平遺跡と同様に瓦葺きの建物を伴わず、仏教関連の遺物を出土する8世紀中頃を中心とする時期の遺跡が確認され始めている。代表的な遺跡として丸塔などを出土した安来市の才ノ神遺跡が挙げられる^⑦。これらの遺跡は当地方のこの時期における仏教のあり方の一端を示す資料として重要な意義を持つものと思われる。

また、上記の観点から当遺跡を丘を持たない寺として捉えることができるならば、宍道町では古代にさかのぼる寺跡の初確認例ということになる。

註 1 『宍道町史 資料編』宍道町 1999

註 2 『出雲国府跡発掘調査概報』松江市教育委員会 1970

註 3 林健亮「灯明皿型土器から見た仏教関連遺跡」「出雲古代史研究」第10号 2000年

『荒畠遺跡・ラント遺跡・野田遺跡』島根県教育委員会 2001年

註 4 『渋山池遺跡・原ノ前遺跡』島根県教育委員会 1997年

註 5 註 1と同じ

註 6 『才ノ神・普請場遺跡・島田黒谷I遺跡』島根県教育委員会 1995年

堤平遺跡出土遺物の理化学的分析

(財) 元興寺文化財研究所

1. はじめに

島根県教育委員会により中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内で発掘調査された堤平遺跡出土遺物の保存処理及び理化学的分析は、財団法人元興寺文化財研究所保存科学センターへ委託された。ここでは保存処理及び理化学的分析により得られた若干の知見を報告する。

2. 分析対象と分析内容

今回は銅椀片表面の元素分析を行った。

3. 使用機器及び測定条件

エネルギー分析型ケイ光X線分析装置(XRF)(セイコーセツルメント(株)SEA 5230) 資料の微小領域にX線を照射し、その際に資料から放出される各元素に固有のケイX線を検出することにより元素を同定する。

モブリデン管球使用、大気条件下、コリメータ0.1mm、管電圧50kV

4. 分析方法および結果

方法

銅椀片表面を非破壊でXRF分析した。

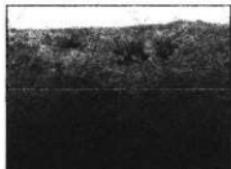
結果

検出したのは銅(Cu)、鉛(Pb)、ヒ素(As)、スズ(Sn)、銀(Ag)、アンチモン(Sb)、鉄(Fe)であった。青銅製品であったと見られるが、全体が緑色の腐食生成物に覆われており、元の組成比は不明である。ヒ素、銀、アンチモンが原料に含まれていたと見られるが、意図的に添加したものもあるかはわからない。鉄は土壤成分に由来するものとみられる。

【測定条件】

測定装置	SEA 5230
測定時間(秒)	180
有効時間(秒)	170
資料室雰囲気	大気
コリメータ	φ0.1 mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	1000
コメント	98125 島根県 No.1 銅椀 表面緑色

【試料像】



視野 : [X,Y] 6.25, 4.67 (nm)

【スペクトル】

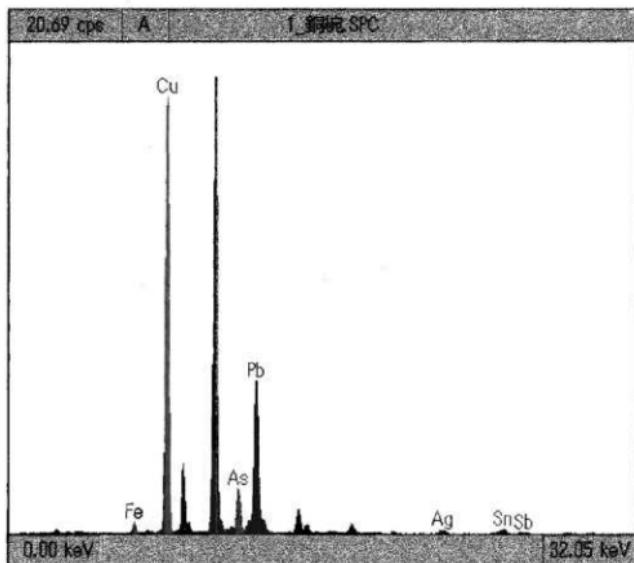


図3 No.1銅椀片表面のXRFスペクトル

写 真 図 版



上空から見た堤平遺跡



堤平遺跡遠景

図版 2



S I -01 完掘状況



瓶形土器検出状況



S I - 02 検出状況



布掘り建物完掘状況

図版 4



SB - 01 検出状況



彫り込みを有する岩盤 2

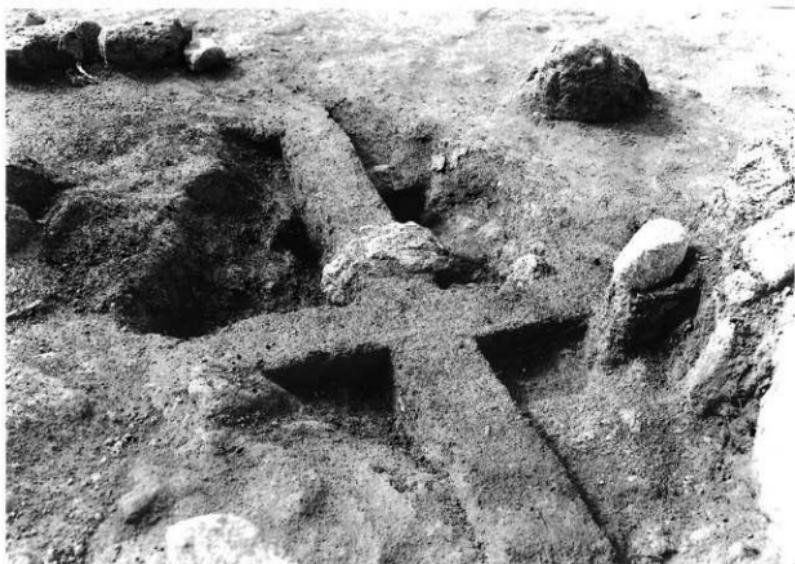


膨り込みを有する岩盤 2



石列 1 検出状況

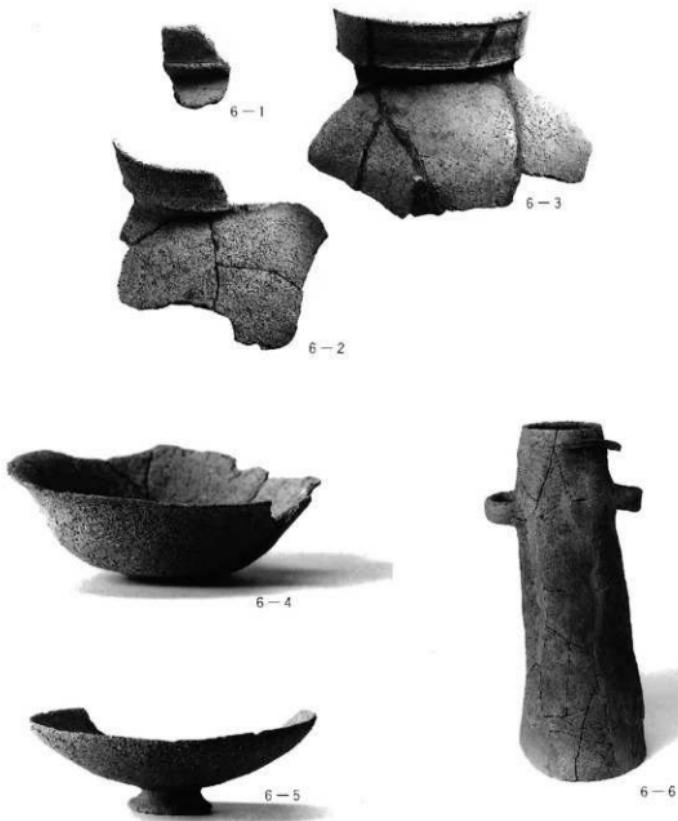
図版 6



SK-07 検出状況



堤平遺跡調査風景

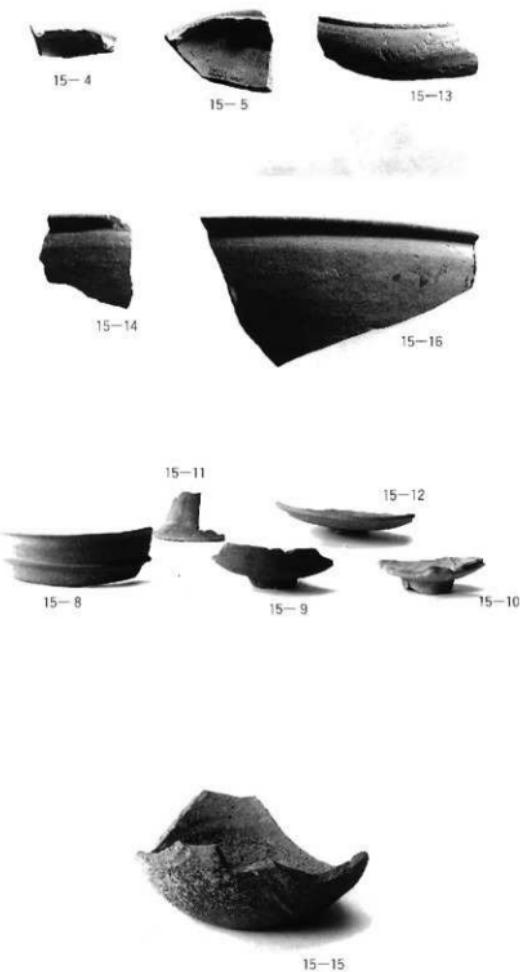


1. SJ-01,-02 出土土器

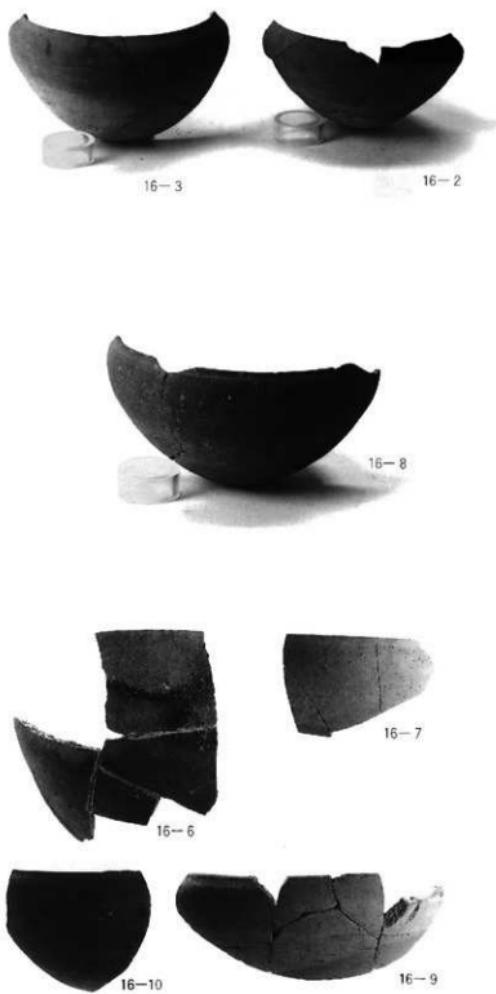


堤平遺跡出土須恵器 (1)

図版 8

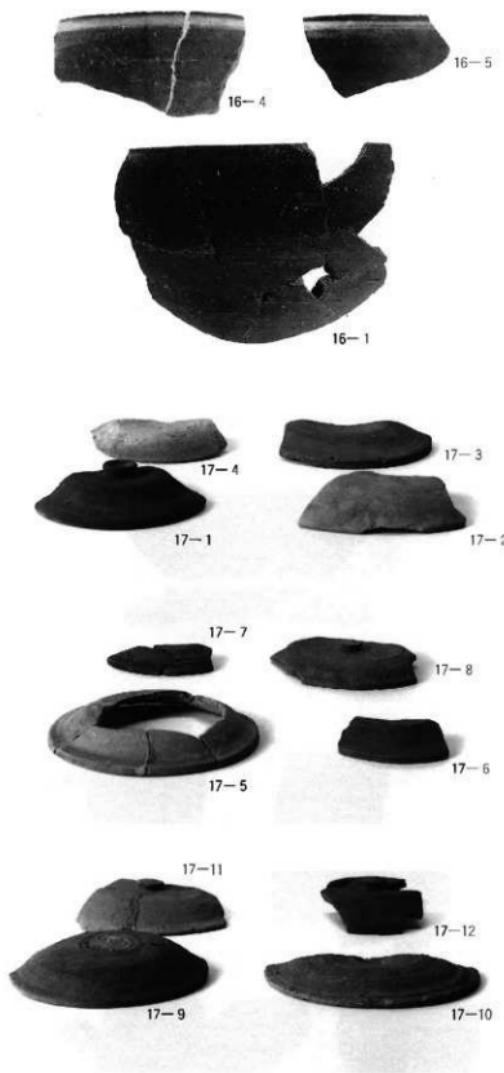


堤平遺跡出土須恵器（2）

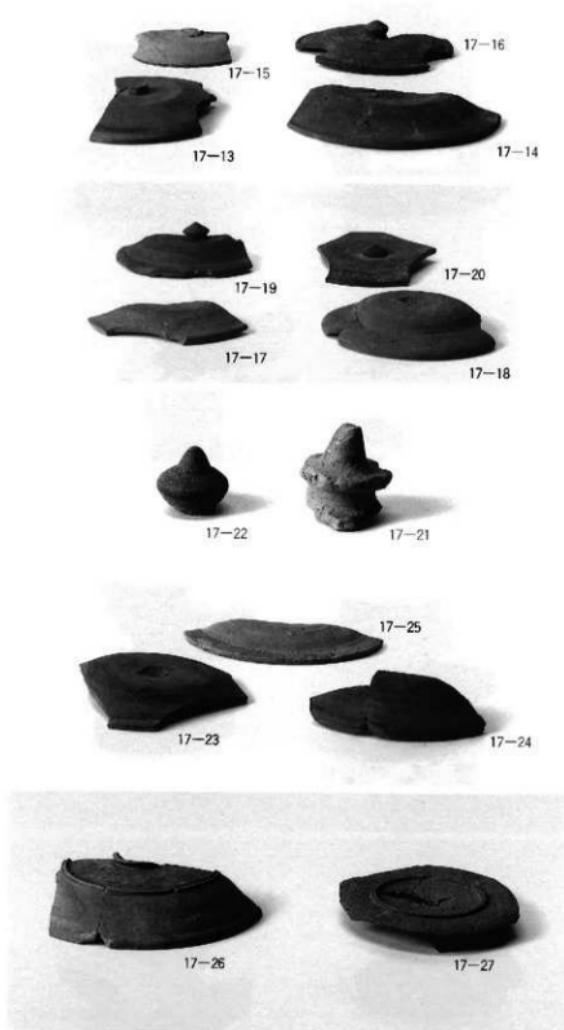


堤平遺跡出土須恵器（3）

図版10

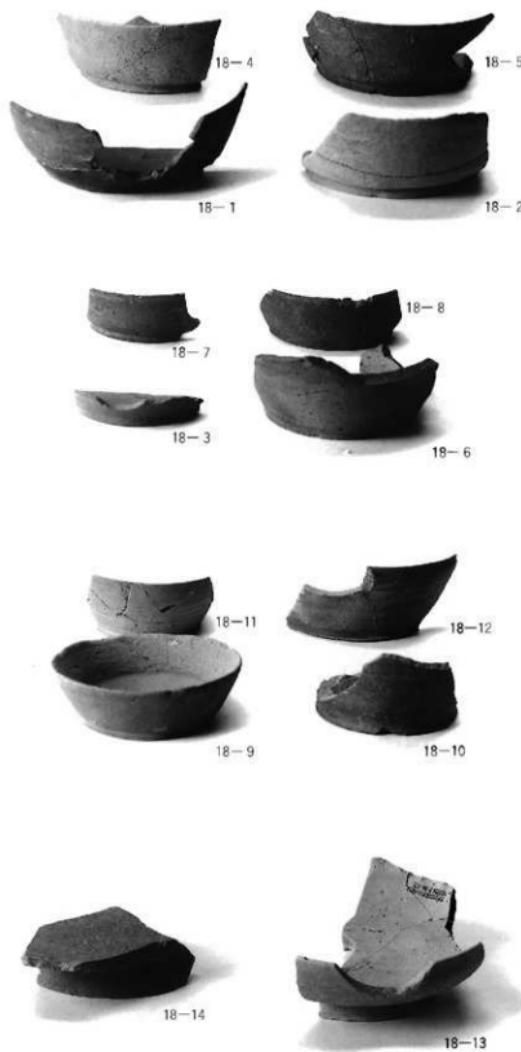


堤平遺跡出土須恵器（4）

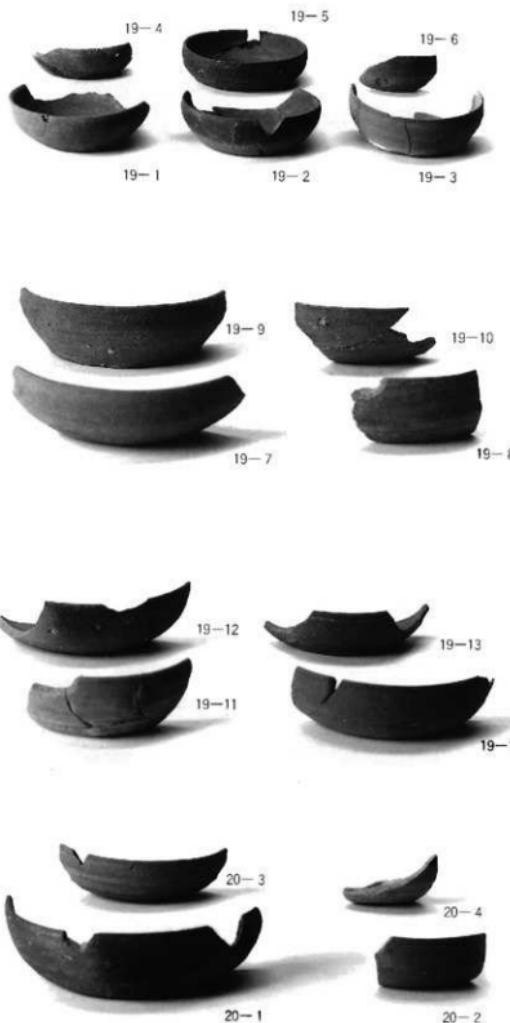


堤平遺跡出土須恵器（5）

図版12

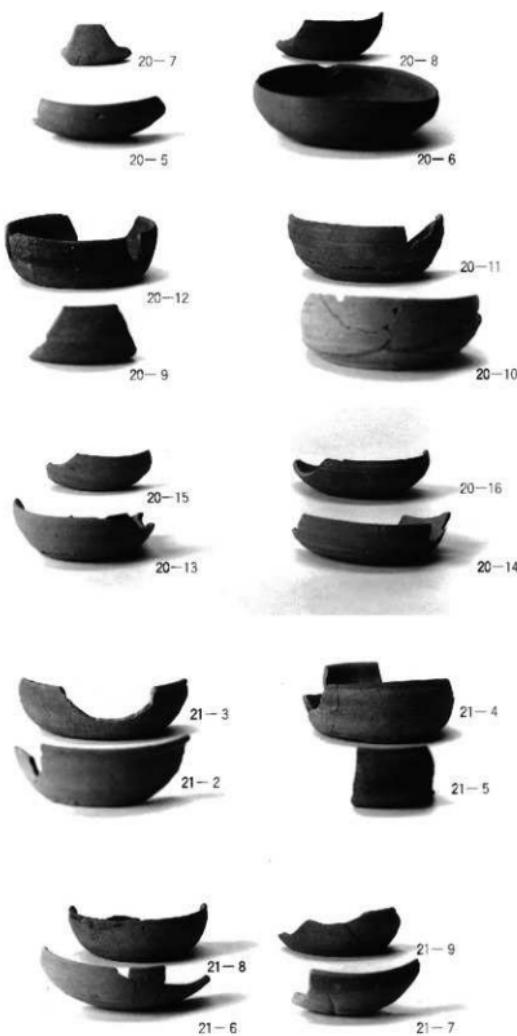


堤平遺跡出土須恵器（6）

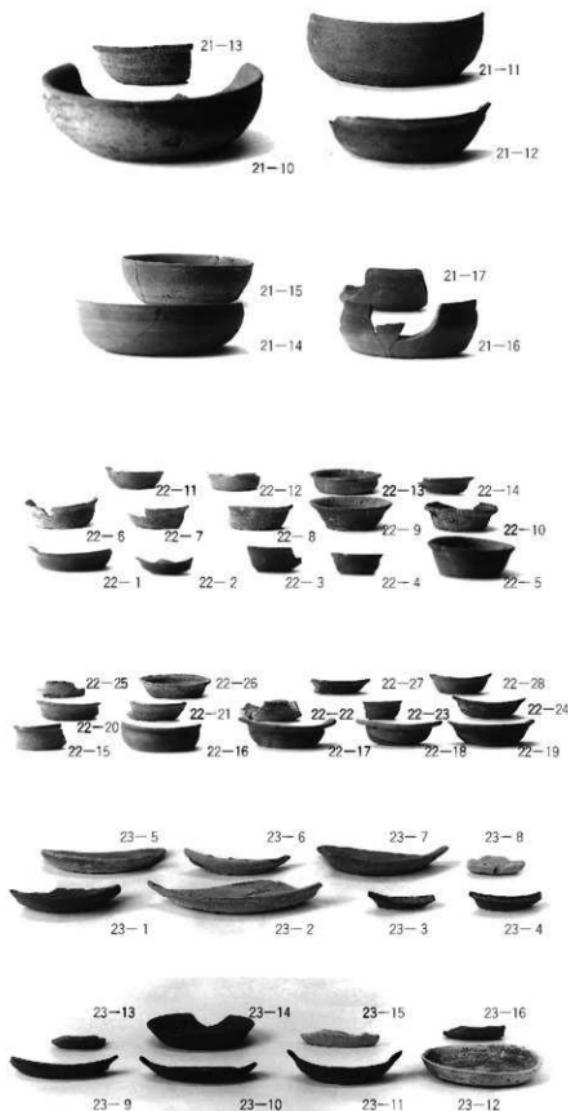


堤平遺跡出土須恵器（7）

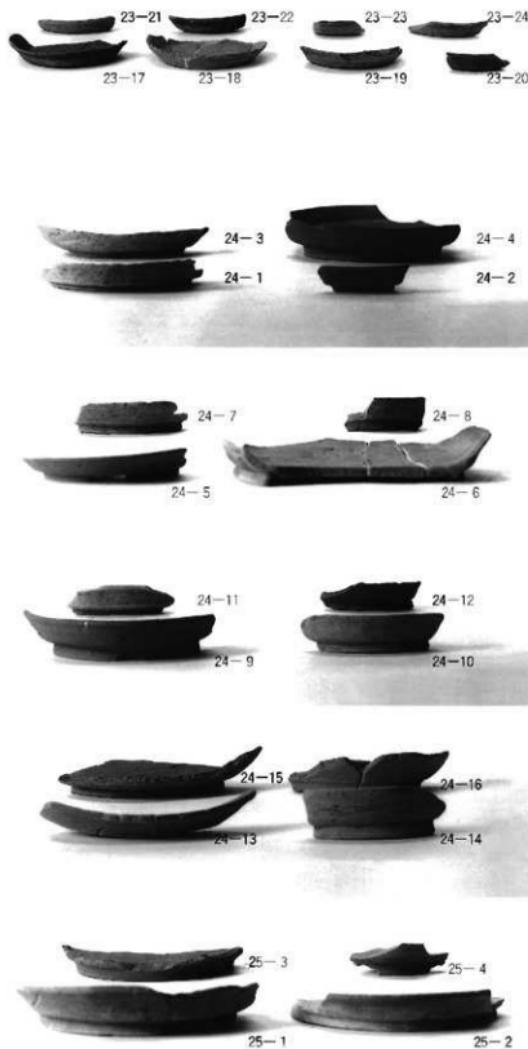
図版14



堤平遺跡出土須恵器（8）



堤平遺跡出土須恵器（9）

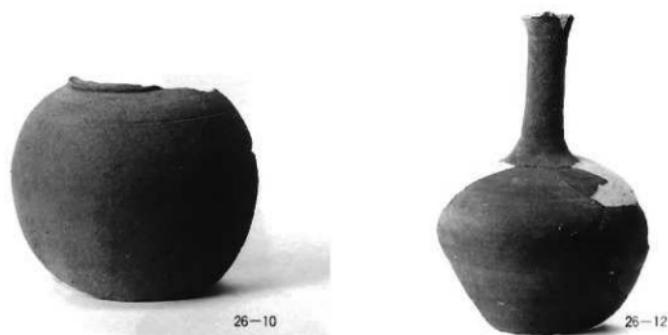
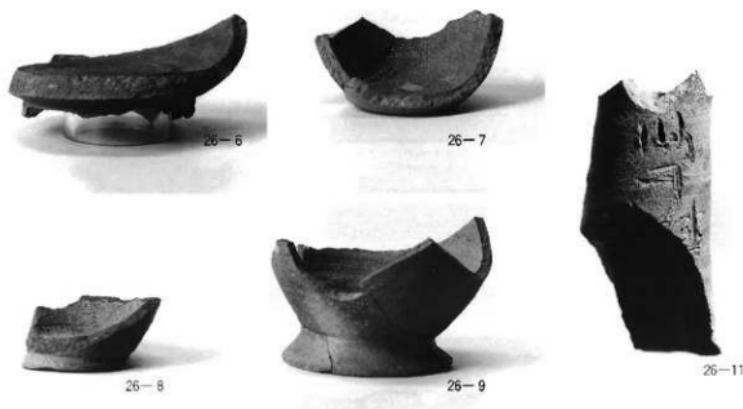


堤平遺跡出土須恵器 (10)



堤平遺跡出土須恵器 (11)

図版18

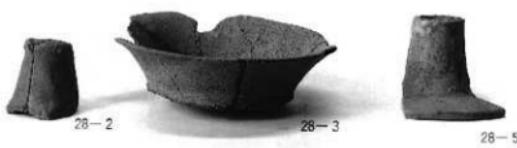


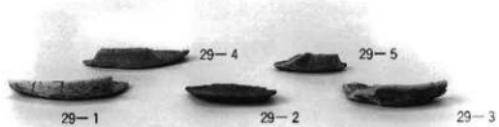
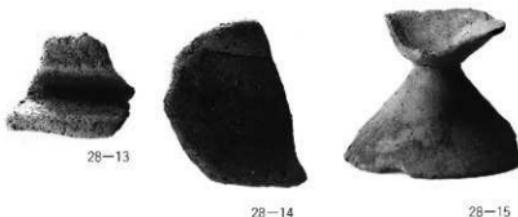
堤平遺跡出土須恵器 (12)

1・堤平遺跡出土須恵器
(13)

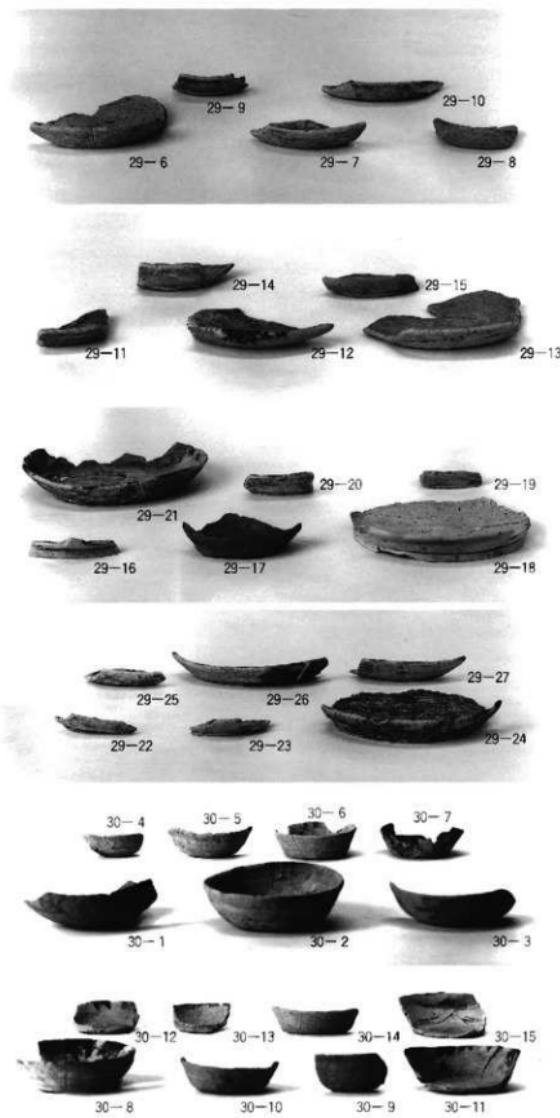


2・堤平遺跡出土土師器
(1)



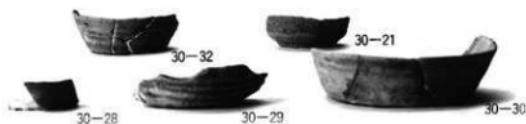


堤平遺跡出土土師器（2）

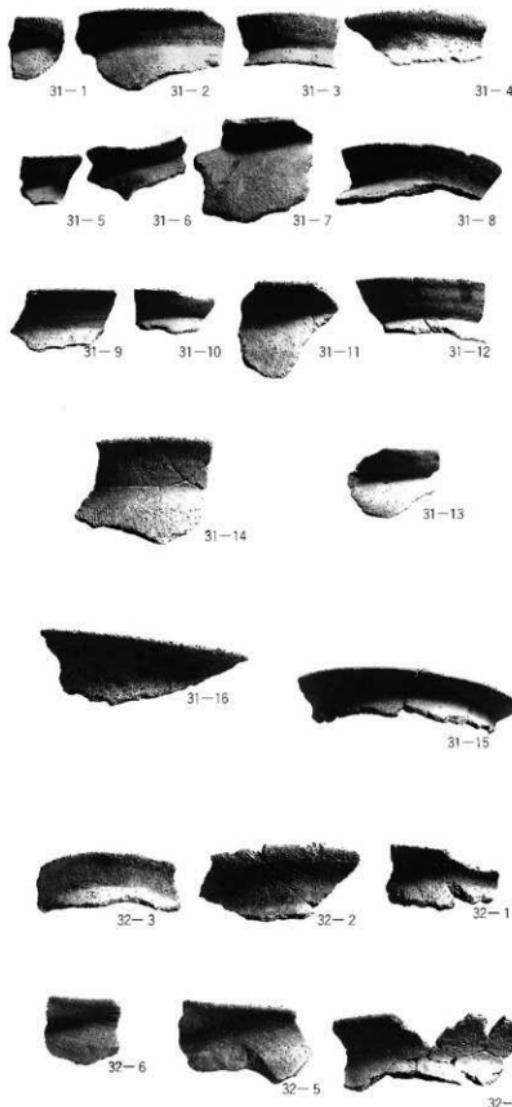


堤平遺跡出土土師器（3）

図版22



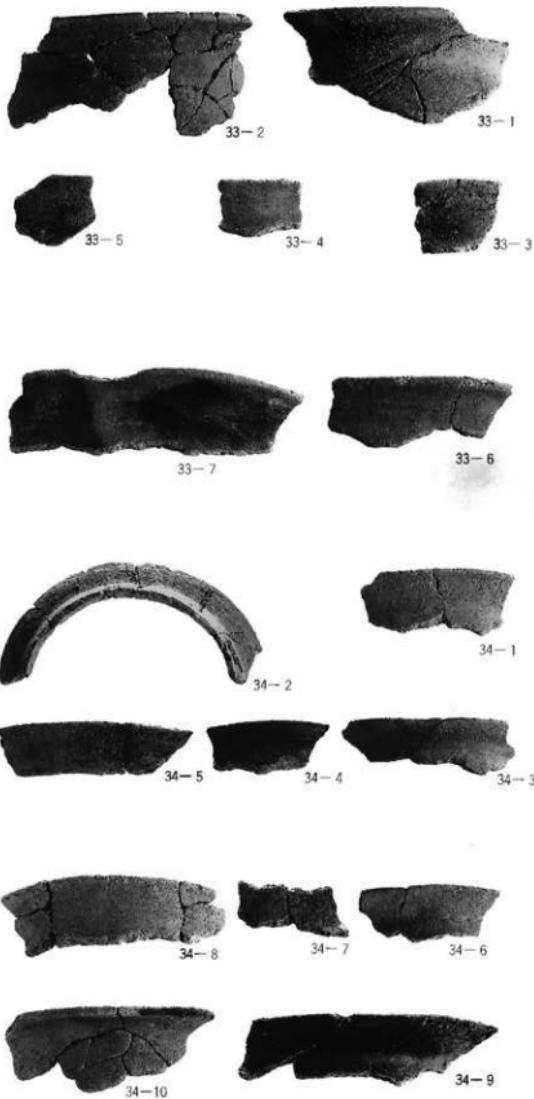
堤平遺跡出土土師器（4）



堤平遺跡出土土師器（5）

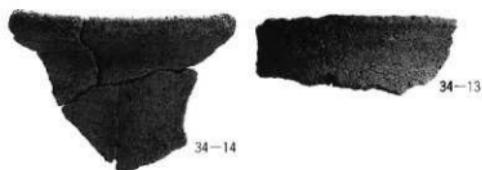


堤平遺跡出土土器 (6)

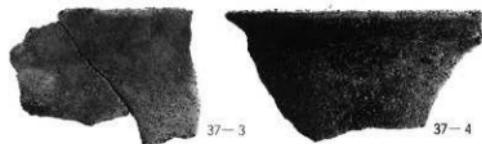


堤平遺跡出土土師器（7）

図版26



堤平遺跡出土土師器（8）



堤平遺跡出土土師器（9）



36-3

36-2

36-1



36-5

36-4

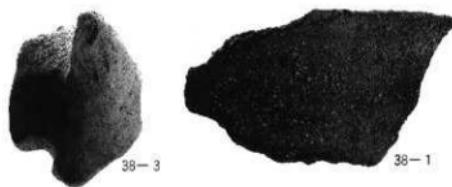


37-6

37-5



37-7



38-3

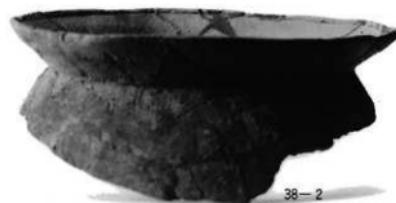
38-1



38-5

38-4

38-2



堤平遺跡出土遺物（1）

図版30



39-5



39-6



39-7



39-8



39-11



39-11



39-10



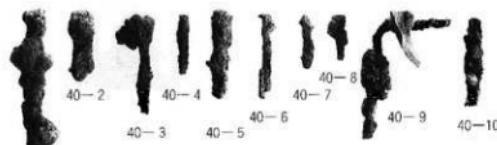
39-9



42-8



42-7



40-2

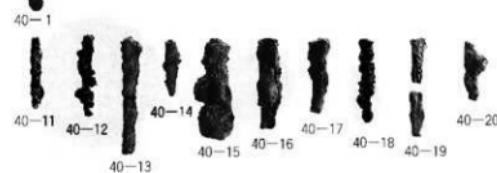
40-4

40-6

40-8

40-9

40-10



40-11

40-12

40-14

40-15

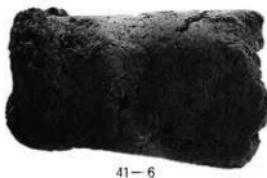
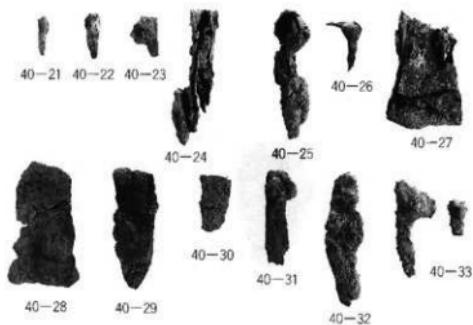
40-16

40-17

40-18

40-13

堤平遺跡出土遺物（2）



堤平遺跡出土遺物（3）



42-1



42-1



42-2



42-3



42-4



42-5



42-6

報告書抄録

ふりがな	つつみびらいせき							
書名	堤平遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	8							
編著者名	神柱端彦・野津 弘							
編集機関	島根県教育厅埋蔵文化財センター							
所在地	〒 690-0131 島根県松江市打出町 33 番地 TEL : 0852-36-8608 (代) E-mail : maibun@pref.shimane.ne.jp							
発行日	西暦 2002 年 2 月 28 日							
所収遺跡名	ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所 在 地	市町村	遺跡番号						
堤 平 遺 跡	八束郡宍道町 大字白石	32307	-	35 度 23 分 34 秒	132 度 54 分 54 秒	1998.04.13 ~ 1998.09.30	2,500m ²	道路建設
所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構			主 な 遺 物	特記事項	
堤 平 遺 跡	集 落 踏	平安時代	堅穴住居跡 2 掘立柱建物跡 1 布掘り建物跡 1			土師器 須恵器		

堤 平 遺 跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 8

平成 14 年 2 月 28 日 発行

発行 日本道路公団中国支社
島根県教育委員会
印刷 (株)報光社
島根県平田市平田町 993 番地